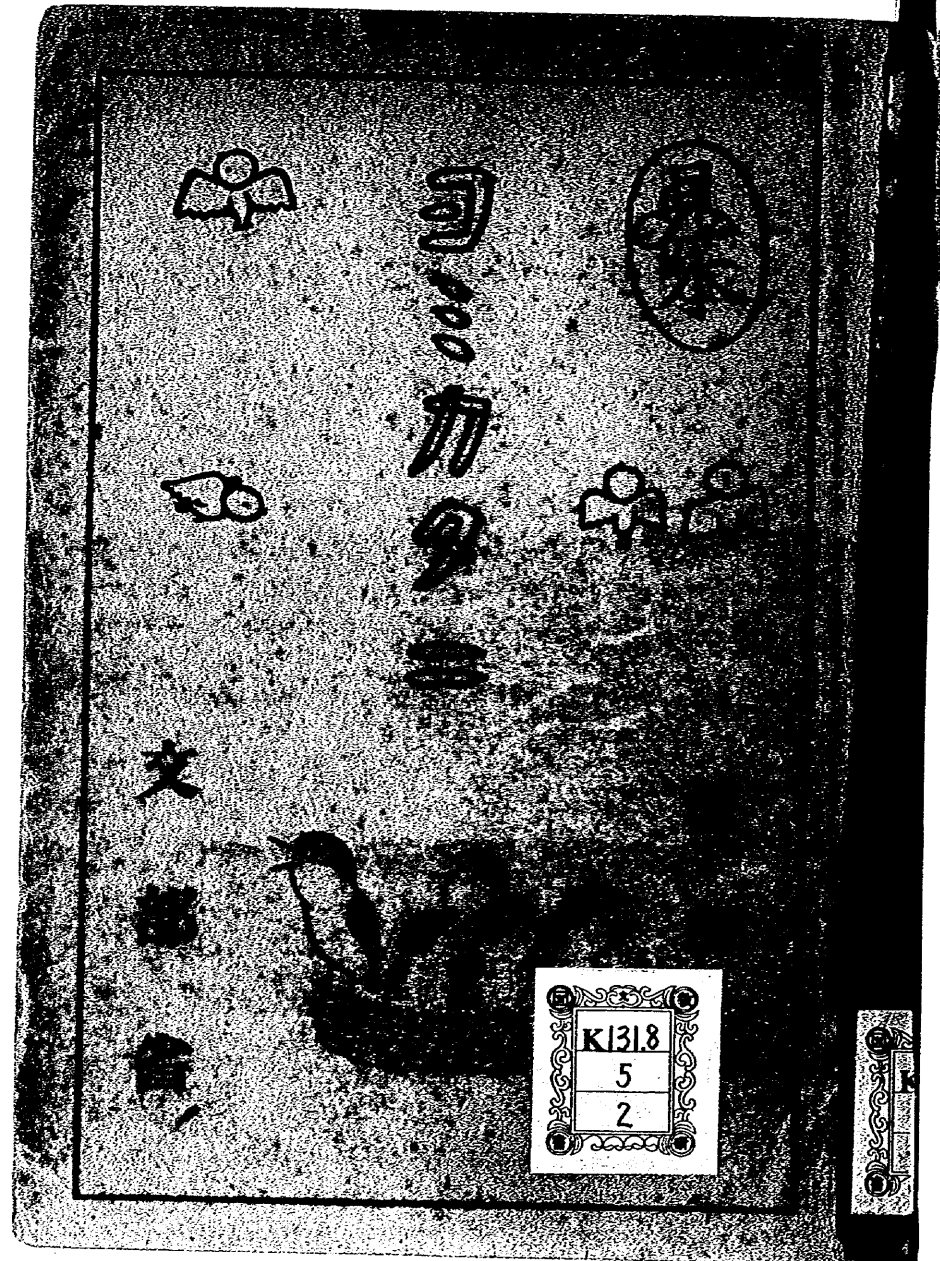




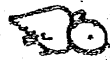
K131.8

5

2



コ  
○○  
カ  
夕  
二



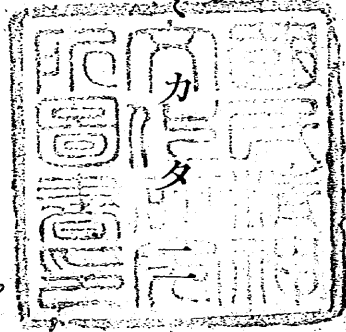
教  
師



文  
部  
省



ヨ



教師用

文部省

贈  
文部省  
六十一  
年  
七月  
廿二日

「ヨミカタ」教師用目録

各説

|                    |    |
|--------------------|----|
| 一 山ノ上……………         | 七  |
| 二 アシタハウンドウクワイ…………… | 一一 |
| 三 ウサギトカメ……………      | 一九 |
| 四 ラジオノコトバ……………     | 二四 |
| 五 西ハタヤゲ……………       | 三〇 |
| 六 カマキリヂイサン……………    | 三五 |
| 七 サルトカニ……………       | 三九 |
| 八 オチバ……………         | 四六 |
| 九 イモヤキ……………        | 五一 |
| 十 コモリウタ……………       | 五六 |
| 十一 オイシヤサマ……………     | 六二 |

|                  |     |
|------------------|-----|
| 十二 デンシヤゴツコ……………  | 六七  |
| 十三 ケンチャン……………    | 七二  |
| 十四 冬……………        | 七七  |
| 十五 お正月……………      | 八五  |
| 十六 兵タイゴツコ……………   | 八九  |
| 十七 ネズミノヨメイリ…………… | 九四  |
| 十八 シヤシン……………     | 一〇一 |
| 十九 カゲエ……………      | 一〇六 |
| 二十 日本のしるし……………   | 一一二 |
| 二十一 花サカヂヂイ……………  | 一一六 |
| 二十二 ユメ……………      | 一二二 |
| 二十三 机とにしかけ……………  | 一二六 |

附 録

|               |     |
|---------------|-----|
| 二十四 ウグヒス…………… | 一二三 |
| 二十五 つくし……………  | 一三八 |
| 二十六 汽車……………   | 一四二 |

話し方指導要項

|              |     |
|--------------|-----|
| 一 指導要項……………  | 二〇八 |
| 二 指導要項例…………… | 二二三 |
| 三 参考文題……………  | 二二〇 |

|               |     |
|---------------|-----|
| 新出讀替文字一覧…………… | 一四八 |
|---------------|-----|

|               |     |
|---------------|-----|
| ヒラガナ提出一覧…………… | 一五三 |
|---------------|-----|

|           |     |
|-----------|-----|
| 運筆順序…………… | 一五七 |
|-----------|-----|

|                     |     |
|---------------------|-----|
| 鉛筆による書き方指導上の注意…………… | 一五八 |
|---------------------|-----|

|               |     |
|---------------|-----|
| ヨミカタ二の發音…………… | 一六〇 |
|---------------|-----|

綴り方指導要項

|              |     |
|--------------|-----|
| 綴り方指導要項…………… | 二〇七 |
| 指導の發展段階…………… | 二〇七 |
| 初等科第一學年…………… | 二〇八 |

指導の發展段階

|                |     |
|----------------|-----|
| 指導の發展段階……………   | 二三八 |
| 初等科第一・二學年…………… | 二三九 |

各  
說

## 一 山ノ上

### 教材の趣旨

巻頭に展望的な詩を載せて、明朗潤達な感情を養ふ。主題は山上の展望であるが、現実的な自然の観照といふよりは、寧ろ子どもの夢のやうな憧憬感であると思ふべきではない。

「あの山の向かふに何があるだらう」山國に育つた子どもでなくとも、遠い森かげや岡續きの地平線を見つめたら、さうした感情を起すに違ひない。この「あこがれ」の感情がこの詩の基調である。子どもは「あの山に登つたら、向かふに何があるだらう。お話に聞く海が見えはしまいか」とあこがれる。實際登つて見れば、現實は大抵山の向かふは又山である。しかし子どもは海を夢想してゐる。その夢想の海をここに展開して見せたのがこの詩である。

八  
山の上に登つたら、山の向かふに村が見え、村には田圃が続いて、その田圃のさきにあこがれの海が見える。それは卷一の「トビトカ」で始めて知つた「ヒロイ、ヒロイウミ」であり、空ノヤウニヒロイ海である。その海には、小サイシラホが白鳥のやうに浮いてゐる。この詩は、かうした「あこがれ」を持つてゐる子どもに、山登りをしたものが物語つてゐると見たらよからう。もちろん海濱で育つた兒童には、この海をもつと直接的な氣持で取扱ふべきである。

#### 文章

卷一の童謡が次第に詩の形を整へて、七五調三句が一聯をなし、三聯で全體ができてゐる。七音は時に「ヒロイ、ヒロイ」「青イ、青イ」「青イ海」のやうに六音になつてゐるが、全體の韻律に變りはなく、却つて素朴な感じさへ與へてゐる。

この詩は、各聯が漸層的な表現で進んでゐる。山上から見下す田圃つづきの村、その村の彼方に展開する青い海、さうして最後に青い海の

#### 取扱の要點

上に浮かぶ小さな白帆。この漸層的な表現こそ、彼方へ、彼方へとあこがれる童心の相であり、行方でもある。さうして同じやうな敘述の反復によつて美しく展開されて行くと、ところに童謡らしい感じがられる。

読むこと 發音を正し、詩の韻律を生かし、反復の語句に注意して読みを正しく指導する。なるべく朗讀をくりかへさせて詩の情を感じさせるやうにし、自ら暗誦に誘導する。これから暗誦しませうなどと暗誦を強要しないで、暗誦し得るやうに計畫することが指導の上策である。

文字語句を指導し、読むこと、話すこと、書くこと相俟つて読みを確實にする。

コトバノオケイコ三頁(一)の文を読ませ、本文の理會に資する。

話すこと 山登りについて體驗と結んで話をさせる。またコトバノオケイコ三頁(一)によつて話をさせ、挿畫掛圖について感想を發表させる。

書くこと コトバノオケイコ五頁(二)によつて文字を正確に書かせ、なほ全文を書寫させる。

文字の指導 新字を中心として指導し、コトバノオケイコ五頁(三)によつてカナヅカヒに注意させる。

注意すべきことは文字語句語法等

アクセント

ウミ(海)——ウミ(腰)——ウミ

矯正すべき訛音方言

ムカフ——「ムゴ」とならないやうに注意する。

ツヅク——「ツズグ」とならないやうに注意する。

ソノサキ——「ソノサギ」とならないやうに注意する。

ヒロイ——「シロイ」の如き訛音を矯正する。

牛タ——「イダ」とならないやうに注意する。

文字

新字——村海(責アオイ方ホー)

語句語法

次の如き反復の語句に注意し、それが韻文として韻律的に形を整へてゐることを指導者は知つておく必要がある。

山ノムカフハ村ダッタ。

タンボノツヅク村ダッタ。

ヒロイ、ヒロイ海ダッタ。

青イ、青イ海ダッタ。

青イ海ニウイデキタ。

トホクノ方ニウイデキタ。

特に「ヒロイ、ヒロイ」「青イ、青イ」の如きは意味にも關係があつて「大そう廣い」「大そう青い」の意であることに注意する。

備考

連絡

ヨミカタ「トビトカメ」の發展として取扱ふ。

ウタノホン上「ウミ」とも連絡して取扱ふ。

## 二 アシタハウンドウクツイ

教材の趣旨

運動會と遠足、兒童にとつてこれぐらゐ楽しい嬉しいものはない。

指折りかぞへてその日を待ち、その前日になれば落着きを失ふまでに喜ぶ。その喜びの半面に於いて、氣にかかるものは天氣である。雲でも出ようものならもうじつとしてはゐられない。本教材は兒童のかうした生活を捉へて對象としたものである。随つて運動會の前日に於ける天氣の變化に伴ひ、移り行く兒童の心情が自らあらはれてゐる。怪しくなつた空模様を心配して、勇はテルテルバウズを作り、木の枝につるしたが、とうとう雨が降出して失望する。母の言ひつけで使ひに行くと、ラジオが明日は天氣になると豫報をしたので心は一時に明かるくなり、喜び勇んで家に歸り母に話す。「オイ、オイ、オペンタウヲコシラヘテアゲマスヨ」といふ母のことばも、この喜びのあらはれに外ならない。

テルテルバウズを作るといふことは、一種の迷信だと考へる向きもあらうが、そこに主體的な兒童の生活があるのであつて、あへて大人の迷信と混同すべきではない。しかも本教材では、テルテルバウズを作

つてもその効果はなく、むしろ科學的なラジオの天氣豫報に信頼する態度が濃厚である。なほテルテルバウズを作るところに、作業的な意義があることを忘れてはならない。

ラジオは、卷一アサガホではじめて鑑賞的に提出されてゐるが、本課では更に科學的な意味を以てあらはされてゐる。

#### 文章

文章は、天氣の變化に伴なつて動く勇の心を中心として表現してゐる。

ヒルスギカラ、空ガクモツテ來マシタ。

突如として空模様から書起してゐるが、次の

アシタハウシドウクワイデス。勇サンハ、天キガシンバイデタマリマセン。

の敘述で、事情がはじめて明瞭になる。即ち明日の運動會と、天氣の心配が、この文の方向を決定するのである。「外へ出て、空ばかり見てゐる

勇は心配の餘りテルテルバウズを作り、木の枝につるした。さうして  
テルテルバウズ、テルバウズ、

アシタ天キニシテオクレ。

と聲をあげて歌つた。童謡は傳統の古謡で、兒童に親しまれてゐるものであり、それによつて勇の希望が表されてゐる。ところでその希望は裏切られ、やがて雨が降出した。

テルテルバウズハ、ビシヨヌレニナツテ、ナイテキマス。

テルテルバウズが泣いてゐるところに、子どもらしい感情移入があり、擬人的にあらはされてゐる。少したつてから、母に言ひつかつてはがきを出しに行く。

「雨がフツテツマラナイナア。」

は失望の聲であるが、しかしこのお使ひが一道の光明を見出す奇縁となつて、

「コンヤハ雨デスガ、アスハヨイ天キニナリマス。」

といふラジオの天氣豫報を聞き、勇の心は急に浮かび上つた。心配は一瞬に消えて、勇の心は喜びでいっぱいになる。

勇サンハ、ウレシクテタマリマセンデシタ。大イソギデハガキヲ出シテ、ウチヘカヘリマシタ。

心持と行動とによつて、この喜びが強く表現されてゐる。

「オカアサン、アシタハオ天キデス。ラジオガサウイヒマシタヨ。」

はさきの「ツマラナイナア」に比べて如何に生き生きしてゐるか。しかもそこには、ラジオといふ科學文化に信頼する心さへ託されてゐる。

「ラジオガサウイヒマシタヨ」は主體的な敘述である。

「マア、ヨカッタネ。デハ、オイシイオペンタウヲコシラヘテアゲマスヨ。」

母のことばも明かるく嬉しさうで、母としての愛が感じられ、勇の喜びと一體になつてこの文が終つてゐる。

#### 取扱の要點

讀むこと 發音に注意を要する語句が多いから、正確に讀ませるやうにする。特に範讀をくりかへし、朗讀の練習に力を注ぐ。テルテルバウズの童謡は、韻律を生かして讀ませるがよい。

文字語句を指導し讀むこと 話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 運動會の前日または當日の楽しさや、競技についてはコトバノオケイコ七頁(三)によつて話合をさせる。また文章挿畫掛圖を中心とし次のやうな問によつて話合をさせる。

「運動會の前日の賽すぎから、天氣がどんなになりましたか。」

「勇さんはどう思ひましたか。」

「さうしてどうしましたか。」

「どんな歌をうたひましたか。」

「天氣はどうなりましたか。」

「テルテルバウズはどうしてゐましたか。」

「勇さんはどんなに思つたでせう。」

「おかあさんのお使ひに行つた時、勇さんを喜ばせたのは何ですか。」

「ラジオは何といひましたか。」

「勇さんはどんなに思つたでせう。」

「うちへかへつて、おかあさんに何といひましたか。」

「おかあさんは何とおつしやいましたか。」

「勇さんはどう思つたでせう。」

なほテルテルバウズを見童に作らせるやうにする。

書くこと コトバノオケイコ六頁(一)により文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば全文又は一部の書寫をさせる。書寫の場合には「勇さん」を「ワタクシ」に置きかへさせてもよい。

文字の指導 新字讀替を中心に文字を指導する。「ウンドウタツイ」はよく「ンドウタツイ」と誤記するから注意を要する。

ことばの仕事 コトバノオケイコ六頁(二)のことばを用ひて簡単な發表をさせる。

注意すべきことば 文字語句語法等

アクセント

カミ(紙髪)——カミ カミ(上)——カミ

カサ(傘)——カサ カサ(笠)——カサ

矯正すべき訛音方言

・ヒルスキ——「シルスキ」の如き訛音を矯正する。

アシタ——「アヒタ」の如き訛音を矯正する。

外へ——「ッ」の如き訛音を矯正する。

「バカリ」——「バカシ」「バツカリ」「バリ」「ベ」等の方言を矯正する。

枝ニ——「イエダ」といはないやうに注意する。

ケレドモ——「ケンドモ」の如き方言を矯正する。

クラク——「クラグ」とならないやうに注意する。「クロー」の如き言ひ方も注意して矯正する。

少シタツテカラ——「スコシタツテガラ」とならないやうに注意する。

イクト——「イグト」とならないやうに指導する。

ウレシクテ——「ウレシクツテ」といはないやうにする。

文字

新字——天<sup>テ</sup>キ 外<sup>ゲ</sup>枝<sup>エ</sup>店<sup>テン</sup>

讀替——出<sup>デ</sup>シニ

語句語法

「ビシヨヌレ」「イヒツカッテ」は文に即して意義を明らかにする。

次の如き語句の意義用法に注意する。

シンバイデタマリマセン。

ウレシクテタマリマセンデシク。

備考

連絡

ヨイコドモ上「ウンドウククワイ」、エノホンニ「ウンドウククワイ」と教材上の連絡がある。

### 三 ウサギトカメ

教材の趣旨

イソツ、ア物語にある話であるが、江戸時代以降わが國に一般的な話となつてゐる。ここでは、寓話としてよりも童話として取扱つてあることに注意を要する。歩みののろい龜が、足の速い兎に勝つたといふところに、小さい者弱い者が大きい者強い者に勝つ童話としての興味があり、この期の兒童には、それで十分であつて、油斷大敵といふやうな寓意に正面から觸れる必要はなく、兎の「ヤア、カメサンダ。シマツタ、ジ

「マッダ」のことばによつて、自然に悟らせる程度に止める方がよい。説話の内容は、繪本や唱歌により多くの兒童に親しまれてゐるが、今これを劇的に表現して二場の對話教材とし、興味を深めるとともにことばの練習に資するものたらしめた。

# 文章

はじめて出た劇形式の文章である。卷一第二部の教室に於ける氏名點呼や、電話遊びに對話の萌芽があり、第三部のシタキリスズメに劇的構成の要素が認められるが、本教材は、これから發展した極めて素朴な劇である。ウサギとカメの對話ばかりから成立つてをり、二場に分れてゐる。

第一場はウサギとカメが出會つて相談の上競走するところで、ウサギは常にカメに積極的に働きかけてゐる。

「カメサン、コンニチハ。」

「ナニカ、オモシロイコトバナイカナ。」

「カケッコヲシヨウカ。」

「デモ、ボクノカチニ、キマツテキルナ。」

「デハ、ヤラウ。ケツシヨウテンハ、アノ山ノ上ダヨ。」

「ヨウイ、ドン。」

どこまでも積極的に働きかけ、勝氣なやや傲慢な趣があらはれてゐる。これに對してカメは、

「ウサギサン、コンニチハ。」

「サウダネ。」

「ソレハオモシロイ。」

「山ノ上。イトモ。」

のやうに常に受身であるが、その間に落着いた悠揚迫らない趣が見られる。

第二場は劇的興味の高調するところである。カメを見くびつて晝寝をするウサギ、ウサギの油斷を見抜いて追越すカメ、目を覺して狼狽

するウサギ、勝どきをあげるカメ、失策を悔むウサギ、事件の展開は劇的興味を漸層させる。後半の、

ウサギ「アア、イイキモチダツタ。マダ、カメサンハココマデ来ナイダ

ラウ。ドレ、出カケヨウカナ。

オヤ、山ノ上ニダレカキルゾ。」

カメ「バンザイ。」

ウサギ「ヤア、カメサンダ。シマッタ、シマッタ。」

は本文の頂點で、兒童がカメのために快哉を叫ぶところである。簡潔素朴な對話、「グウグウ」の擬聲、急ゲ、急ゲ、「シマッタ、シマッタ」の反復、「オヤ」「ヤア」「アア」「カメサンダナ」「ヒルネヲシテキルゾ」「イイキモチダツタ」「出カケヨウカナ」等の感動的な表出によつて對話が生かされてゐる。

#### 取扱の要點

讀むこと 全部對話の文であるからなるべくお話をするやうに讀ませる。語調にも注意を要する。讀みが確實になつたら、兒童を指名して劇的に朗讀させる。

話すこと 對話を中心に挿畫(挿圖)と連繫して話すことの練習をさせる。

書くこと コトバノオケイコ七頁(一)によつて文字を正確に書かせ、また書取をさせる。

文字の指導 新字讀替を中心として文字を指導し、コトバノオケイコ七頁(二)によつてカナヅカヒに注意する。

#### 注意すべきことは文字語句語法等

##### 矯正すべき訛音方言

オモシロイ——「オモッショイ」「オモロイ」等の訛音を矯正する。

カケツコ——方言が多い。注意して指導する。

イトモ——「エートモ」といはいやうに注意する。

ヒルネ——「シルネ」「ヒンネ」等の訛音を矯正する。

シヨウ——「ショ」ではない。「シヨ」と發音する。

来ナイ——「キナイ」といはいやうに指導する。

##### 文字

新字——急ゲ

讀替——来ナイ

##### 語句語法

「コンニチハ」の挨拶、「ゲッショウテン」の語義は多少説明する必要がある。

「オヤ」「アア」「ヤア」及び「出カケヨウカナ」「キルゾ」「カノサンダナ」「イイキモチダッタ」「出カケヨウカナ」等の感動的語句に注意させ、その氣持を明らかにする。

「ダウダウダウ」の擬聲、急ゲ、急ゲ、「シマッタ、シマッタ」の反復による修辭的語句に注意する。

#### 備考

#### 連絡

ヨミカタニ「アシタハウンドウクワイ」と關聯し、かけづこを主題とした童話であることに注意して取扱ふ。

### 四 ラジオノコトバ

#### 教材の趣旨

本教材は「アシタハウンドウクワイ」に關聯してラジオのことばをたてた韻文であり、文化的方面から見ても、又國語の方面から見ても極めて重大な意義をもつてゐる。今日ラジオは文化の第一線に立つて、

國策の闡明に、各種の報道に、國民の教養に、國際親善に、はたまた慰安娛樂に活用せられ、國民生活に必須な機關となつてゐる。そこに高度な文化的意義が感じられ、しかも國語によつて放送せられるところに更に國家的に重大な意義が存する。ラジオのことばは放送者によつて多少の差異はあるとしても、音聲言語として比較的醇正なものといひ得るであらう。中には殆ど模範的といつてよいものもあつて、これらによつて國語の社會的教化が行はれ、しかも「正シイコトバ」「キレイナコトバ」といふ中には、國語の特質、外國語にみられない國語の美しさが意味せられてゐる。随つて國語の愛護尊重といふ點からしても重要な教材である。

更に滿洲支那を始め、世界各國に向かつて行はれる海外放送は、國語の海外進出の一翼をなすもので、世界に進出する國語の現狀と、東亞共榮圈の共通語を以て任ずる國語の將來を想ふ時、本教材の重要性がいよいよ痛感せられる。即ちラジオノコトバに日本語の世界的發展と

國運の進展が象徴せられてゐると見るべき教材である。

#### 文章

三聯から成る不定型の詩であるが、全體を一貫した韻律がある。  
第一聯の「日本ノラジオハ、日本ノコトバヲハナシマス」は單純な表現であるが、第二聯第三聯の詩句を豫想しつつ、わが國のラジオが日本語で放送せられるといふ國語意識を強く喚起してゐる。

第二聯は第一聯を受けて、醇正な國語が日本中に聴取せられることを歌つてゐる。「正シイコトバ」「キレイナコトバ」は、醇正なことを意味的に反復し強調したものである。「キコエマス」は第一聯の「ハナシマス」を受け、第二聯の「トドキマス」「ヒビキマス」に照應して、しかも一種の韻律をなしてゐる。

第三聯は、日本語が電波に乗つて海外に進出することを歌つてゐる。即ち一二聯を受けて、正しいきれいな日本のことばが滿洲にも、支那にも、世界中にも響き渡るのであつて、三聯の

日本中ニキコエマス。  
に關聯的に、

マンシウニモトドキマス。

シナニモトドキマス。

と、日本語がアジア大陸に進出して行く愉快な現状を歌ひ、更に

セカイ中ニヒビキマス。

と歌つて、裏面に歐米各國の盛んな日本語研究熱をも匂はしてゐる。  
「キコエマス」「トドキマス」「ヒビキマス」は漸層的な表現で、韻律の反復と相俟つて効果的である。

#### 取扱の要點

讀むこと 特に發音を正しく指導し、韻律を生かして讀みを練習し、反復により暗誦に誘導する。「ハナシマス」「キコエマス」「トドキマス」「ヒビキマス」の語は音聲の上からも意味の上からも注意して讀ませることが大切である。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと、相俟つて讀みを確實にする。

コトバノオケイコハ頁(二)によつて讀み方を指導し、本文の理會に資する。

話すこと 兒童の日常使用することばについて反省させ本文及びコトバノオケイコ八頁(二)に基づき次のやうな間によつて話合をさせる。

「日本人はこの國のことばを話しますか。」

「日本のラジオはこの國のことばを話しますか。」

「ラジオのことばは美しいと思ひませんか。」

「日本のことばはどうですか。」

「日本のラジオはどこまで聞えますか。」

「私どもがラジオのやうに正しいことばを使ふと日本のことばはどうなりますか。」

「日本のことばをきれいにするにはどうしたらよいと思ひますか。」

「日本のことばは世界中で使はれるのですが皆さんはそれをどう思ひますか。」

なほラジオの設備のある學校學級ではこれを利用して聴き方を練習する。

書くこと コトバノオケイコ八頁(一)によつて文字を正確に練習させる。また全文を書寫させて理會を深める。

文字の指導 新字讀替を中心として文字を指導する。「正」は筆順の誤りやすい文字であるから特に注意する必要がある。

#### 注意すべきことは文字 語句 語法等

##### アクセント

シナ(支那)——シナ シナ(品)——シナ

##### 矯正すべき訛音方言

セカイ——「シエカイ」の如き訛音を矯正する。

ヒビキマス——「シビキマス」の如き訛音を矯正する。

##### 文字

新字——正<sup>シ</sup>シイ

讀替——日本中<sup>ニ</sup>ジュー

##### 語句 語法

「正シイコトバガキレイナコトバガ」と主部が二度くりかへしてあるのは韻文的な修辭法である。尙その述部として「日本中ニキコエマス」及び第三聯の三句が同様の位置に立つてゐるが、それも韻文としての修辭であつて、その間に重韻が顯著である。

##### 備考

##### 連絡

ラジオに就いてはヨミカタ「アサガホ」及び同二「アシタハウンドウクワイ」の發展として取扱ふ。

## 五 西ハタヤケ

## 教材の趣旨

前課と關聯し、日本人の活躍する滿洲を主題とする教材である。これによつて廣漠たる滿洲を知り、のびのびとした氣持の滿洲へ行つてみたいといふ憧憬感を抱かせるやうな教材である。何事にも進取的な勇が、この教材の主人公となつてゐるのも意味のあることである。わが國と滿洲國とは既に密接不可分の關係にある今日、幼童の頃から滿洲の印象を腦裡に深く印象づけておくことは、國策上すこぶる大切なことである。またこの教材は前課と關聯して、國語の海外進出を物語る一面を有してゐる。

## 文章

滿洲のを、ちさんから送つてもらつた本は、マンシウノ子ドモタチノ

ヨム本であつた。開いてみると、はじめに滿洲の空の美しいことが書いてある。勇は思はず驚きの目をみはつた。果しなき曠野にカウリヤンができることを讀むに至つて、廣大な滿洲の野がおぼろげながらも勇に想像される。

西ハタヤケ赤イクモ、

東ハマルイオ月サマ、

カウリヤンカッテヒロイナア、

ドツチヲ見テモヒロイナア、

滿洲の景色がありありと浮かんで來る。詩は赤い夕焼と、まんまるい月とを對句によつて對照させ、カウリヤンカッテいつそう廣く見える滿洲を思はせ、「ヒロイナア」を繰返してそれを力強く表現し、滿洲平原の雄大感をあらはしてゐる。ここがこの文の頂點であつて、滿洲に對する憧憬の心が自らわいてくる。

勇はもうじつとしてゐられなかつた。外へ出テ、ムネヲハリナガラ、

イキヲイッパイスヒコミ聲高く詩を歌ひ出した。未知の世界に心を  
をどらせてゐる勇の姿が強く感じられる。しかもこの詩が繰返して  
提出され、それで文が終つてゐるところに全體としての餘韻がある。

滿洲の廣さをあらはすために「ヒロイ、ヒロイノハラ」「ヒロビロトシタ  
マンシウ」「ヒロイナア」等語句の變化させてある點にも注意すべきで  
ある。

### 取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導し、全體的にのびのびした氣分でややゆつくり讀ませる。詩は  
韻律を生かして、明朗に讀ませるやうにする。滿洲そのものについては、本教材に示された  
程度に止め、兒童の理會を越えないやうにする。

文字語句を指導し讀むこと 話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章・挿畫・掛圖を中心とし、次の間によつて話をさせる。

「勇さんは滿洲のをちさんから何を送つてもらひましたか。」

「その本にはどんなことが書いてありましたか。」

「滿洲の空はどんなであると書いてありますか。」

ここでコトバノオケイコ十一頁(三)を讀ませ、これも滿洲の本の中にある詩であることを知  
らせる。

「カウリヤンとはどんなものですか。」

ここでコトバノオケイコ十一頁(四)のカウリヤンの繪と連絡する。

「勇さんが本を讀んでいくうちにどんなうたが書いてありましたか。」

「そのうたはどんなことを歌つたのでせう。」

「その本を讀んでゐると勇さんはどんな氣持になりましたか。」

「さうして勇さんはどうしましたか。」

書くこと コトバノオケイコ九頁(一)によつて詩を正しく書寫させる。なほ適當に書取をさ  
せ、また全文を書寫させる。

文字の指導 新字を中心に指導する。「タ」はカタカナの「タ」と混同しないやう、東は「西」と、赤  
は既習の「青」と字義を關係づけて指導する。

コトバノオケイコ十頁(二)によつて「ヲオ」「スヒ」「スフ」「ウタヒ」「ウタハナイ」等のカナヅカに注  
意する。

注意すべきことば 文字 語句 語法等  
矯正すべき訛音方言

一バン——「エチバン」といはいやうに注意する。  
東——「シガシ」の如き訛音を矯正する。

イッバイ——「エッバイ」といはいやうに注意する。

文字

新字——西(ウ)ヤケ 赤(イ) 東(エ)

語句語法

次の對句的の語句を主として讀むことによつて味ははせる。

(西)ハタヤケ 赤イクモ。

(東)ハマルイ オ月サマ。

(カウリヤシ)カッテヒロイナア、  
ドッチヲ見デモヒロイナア。

「オクッテ」イタダキマシタの敬語的語法に注意する。

備考

連絡

ヨミカタニ「ラジオノコトバ」の「マンシウニモトドキマス」を受けて、地理的に發展させた教材であることに注意して取扱ふ。

(以上 十月)

六 カマキリヂイサン

教材の趣旨

兒童の中には、カマキリを見て恐れるものがあるかも知れない。恐れないまでも、親しみの持てない兒童は多いであらう。しかしじつと眺めてゐると、大きな目玉を持つた三角な頭を右に左に動かし、鎌のやうな脚をあげて、のそりのそりと歩き出す。時には腹部を振つたり、急ぎ足にかけだしたりすることもある。その姿や歩き方には一種の滑稽味さへ感じられ、自ら親しみの心が湧いて、ちよつと話しかけたいやうな氣持にもなるものである。この詩はカマキリに對するかうした感情を主題とし、これを擬人化して、カマキリが秋の日に田圃へ稻刈に急ぐと見立てたものである。兒童の主體的な感情に即してかうした滑稽味を感じさせ、カマキリヂイサンと呼びかける親しみの情を起さ

せるやう指導することが大切である。漫畫化された挿畫は、詩の主題を具象化したものである。

# 文章

七五調五句一聯の詩である。第一句は八音であるが、全體としての韻律には變りはない。一聯の詩も珍らしく敬體口語文になつてゐるので、いつそう親しみの感を深める。

一聯の詩ではあるが、自ら前後二段に分れ、前段の「カマキリヂイサン」イネカリニ、カマチカツイデアゼミチヲ、トホイタンボヘ急ギマス」が中心となり、後段が添への形になつて全體を整へてゐる。「トホイタンボ」といふところに、現實のそれから離れた空想の世界が暗示されてをり、そこに擬人的な詩としての興味が感じられる。もちろんそれを兒童に與へる必要はないが、主體的な兒童の心は、自らこの詩を讀んだだけでさうしたものを感得するであらう。

全體として擬人的な表現に注意するとともに、「カマキリヂイサン」「カ

マチカツイデ」の頭韻や、急ギマス」の反復による脚韻が、この詩の音調上の興味をなしてゐることにも注意して指導すべきである。

## 取扱の要點

讀むこと 發音を正し讀みを指導する。七五調の韻文で、自然に口調がととのふから、よく韻律を生かして讀みを練習する。讀ませることによりカマキリヂイサンに對する親愛の心を深め、暗誦に誘導する。

文字語句を指導し讀むこと 話すこと 書くこと 相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 自然の觀察の「とり入れ」と關聯し、文章挿畫を中心として話をさせる。

「カマキリヂイサンはどこを歩いてゐますか。」

「カマキリヂイサンはどこへ行きますか。」

「カマキリヂイサンは何をかついでゐますか。」

「カマキリヂイサンは何をしに行きますか。」

「稻を刈るのはいつですか。」

「田圃ではお百姓が何をしてゐると思ひますか。」

「お天氣はどうですか。」

書くこと コトバノオケイコ十二頁(一)によつて文字を正確に書かせる。  
 文字の指導 新字を中心に指導する。秋の「ノギヘン」は誤りやすいから注意を要する。  
 ことばの仕事 コトバノオケイコ十二頁(二)によつて   の中に入れるべきことば  
 をいはせそれを書入れさせる。「カリ」「カマ」「アゼミチ」「トホイ」「秋」「キレイ」「カマキリ」の順に  
 なつてゐる。書入れた後文章を読ませ詩の文と對照して理會に資する。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

アクセント

カマ(鎌)——カマ(釜)——カマ

矯正すべき訛音方言

カマキリ——「カマキリ」と「トカゲ」の稱呼を逆に用ひる地方關東地方の一部では特に注意  
 して矯正する。

タンボ——「タンボ」と訛る地方では矯正を要する。

文字

新字——秋

備考

連絡

自然の觀察二「とり入れ、エノホンニ、秋ノケシキ」と連絡して取扱ふ。

## 七 サルトカニ

教材の趣旨

わが國の五大童話の一つとして古來もてはやされてゐる猿蟹合戦  
 を教材とする。この説話は時代により地方により多少違つた形で傳  
 承されてゐるが教材は今日廣く行はれてゐる話を骨子とし教育的見  
 地から多少修正を加へたものである。即ち親蟹が猿に柿を投げつけ  
 られて死に、子蟹が仇を討つて猿を殺したといふやうな點はこれを避  
 けて、最後に猿が悪かつたと謝罪したことに改めた。しかもそれは雛  
 遁(ニゲル)宇計(ウケイ)木などの傳承に近づくものである。

説話は全體的に兒童の感興を深めるため、繰返しが多く用ひられて  
 をり、自ら韻律的に敍せられてゐるとともに變化に富んでゐる。單な

る勸善懲惡の教訓に陥ることなく、童話の本質的な興味から自然に感じさせる程度に説話を生かして取扱ふことが大切である。

## 文章

卷一の童話を受け、「ネズミノヨメイリ」「花サカデヂイ」とともに本巻を代表する説話であつて、長文であるとともに、文の構想は多分に劇的である。先づ猿と蟹が握飯と柿の種とを交換する。これが話の發端で、次は蟹が柿の種を插いて實をならせる場面になるが、ここには反復形式が巧みに用ひられてゐる。

「早くメヲ出セ、柿ノタネ。」

「早くメヲ出セ、柿ノタネ。」

「早くメヲ出セ、柿ノタネ。」

かうした形式が、木になつたところにも、實がなつたところにも反復されてゐる。蟹のことば、「早くメヲ出セ、柿ノタネ」「早く木ニナレ、柿ノタネ」「早くミガナレ、柿のタネ」も連續的な反復で、自ら七五調にさへなつ

てゐる。「メガ出マシタ」「木ニナリマシタ」「大キナ柿ガ、タクサンナリマシタ」といふ端的な敘述もまた一種の反復である。

第三の場面は、猿が柿の實をたべ、蟹に投げつけて怪我をさせるところで、教育的に改めてある話の筋に注意すべきである。第四の場面は、蜂と栗と臼とが蟹を助けて猿を懲らす相談をするところである。

「ソコへ、ハチガ來マシタ。」

「ウスガ來マシタ。」

「栗ガ來マシタ。」

は例の反復である。第五の猿を懲らしめる場面では、栗にとびつかれて火傷をし、水をつけに行つて蜂に刺され、戸口から逃出さうとして臼に押さへつけられるのが連續的な反復であることに注意を要する。大詰の場面では全人物をやはり反復形式で、「ソコへ、カニガ來マシタ。」「栗モ來マシタ。」「ハチモ來マシタ」と登場させ、猿の謝罪で終幕となる。全體として劇的に構想されてゐるとともに、常に反復形式が用ひられ

## 韻律的に敘述されてゐる。

## 取扱の要點

## 讀むこと

興味ある説話と變化に富んだ表現とを利用し發音に注意して讀みを指導する。蟹が柿の種に向かつていふことは、韻律を生かすやうに讀ませるがよい。

文字語句を指導し讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。  
コトバノオケイコ十四頁(三)によつて、兒童を指名して劇的に讀ませる。この文は説話の發端と最後の場面とを劇的にあらはしたものであるが、その他の部分も適宜同様に取扱つてよい。

話すこと 文章挿畫掛圖を中心とし次のやうな問によつて話合をさせる。

「猿と蟹は何をとりかへつこしましたか。」

「猿はにぎりめしをどうしましたか。」

「蟹は柿の種をどうしましたか。」

「蟹は柿の種に何といひましたか。」

「芽が出ると蟹は柿の種に何といひましたか。」

「木になると蟹は柿の種に何といひましたか。」

「柿がたぐさんなつた時猿が遊びに来て何といひましたか。」

「さうして猿はどうしましたか。」

「猿はしまひにどうしましたか。」

「蟹はどうしましたか。」

「そこへ誰が來ましたか。」

「みんなでどうすることにしましたか。」

「猿が蟹のうちへ來て火鉢の前にすわつた時、蟹はどうしましたか。」

「それから蜂はどうしましたか。」

「白はどうしましたか。」

「そこへ誰が來ましたか。」

「猿はおしまひにどうしましたか。」

「みなさんはお話をよく読んでどうおもひますか。」

コトバノオケイコ十四頁(三)によつて對話を練習させる。

書くこと コトバノオケイコ十三頁(一)によつて文字を正確に書かせる。なほ適當に書取をさせる。

文字の指導 新字を中心として指導する。「長」「灰」は特に筆順に注意を要する。

コトバノオケイコ十三頁(二)によつて「ヒロヒ」「シマヒ」「アゲヨ」「ウカケヨ」「ウ」のカナヅカヒに注

意する。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

アクセント

カキ(柿)——カキ カキ(牡蠣)——カキ  
ハチ(蜂)——ハチ ハチ(鉢八)——ハチ

矯正すべき訛言方言

カニ——「ガニ」とならないやうに注意する。

早く——「ハヨ」といはいやうにする。

メ——「メ」といふ地方では矯正する。

木——「キ」といふ地方では矯正する。

アソビニ——「アスビニ」と訛る地方では矯正する。

イクツモ——「エクツモ」または「ナシボモ」といふ地方がある。ともに矯正を要する。

ヒバチ——「シバチ」の如き訛言を矯正する。

灰——「ハエ」(蟻)と混同し又は「フエ」「ヘ」などといふ地方では矯正する。

カクレテ——「カゲネテ」といはいやうに注意する。

アツイ——「アチ」の如き訛言を矯正する。

文字

新字——柿 早ク 長イ 栗 煎(マエ) 灰(ハイ)

語句 語法

次の如き命令形の用法について指導する。しかしここでは願望の意味をもつてゐることに注意する。

早くメラ出セ、柿ノタネ。

早く木ニナレ、柿ノタネ。

早くミガナレ、柿ノタネ。

何れも童謡に極めて普通に用ひられる命令形の語法によつて強い願望があらはしてある。倒置になつてゐるのも感情を強くあらはす表現である。

次の文を比較し、並列の助詞「モ」の用法に注意する。

ソコへ、ハチガ、来マシタ。

ウスガ、来マシタ。

栗ガ、来マシタ。

ソコへ、カニガ、来マシタ。

栗モ、来マシタ。

〔ハチモ来マシタ。〕

『ボント』『チクリト』『ドシント』等の擬聲的な副詞の用法を文例によつて指導する。

備考

連絡

カズノホン「猿蟹合戦」十九二十頁と關聯して取扱ふ。

## 八 オチバ

### 教材の趣旨

自然の觀察二「もみぢ」と關聯して、秋の落葉の觀察を主題とした教材である。

靜かな秋の林である。樹々の葉は黄に紅に色とりどりに紅葉し、落葉する。子どもは落葉を踏みながら、ふとその美しい一枚の葉を拾ひあげた。梢を洩れて来る日光にすかして見ると色はいつそう美しく、その中に葉の筋がくつきりと浮いて見える。赤いもみぢの葉を拾つ

### 文章

では、その美しさを感じて押葉にしようといふ。かうした無心の遊びの間に子どもの文學が芽生え、また理科が芽生えるのであつて、ここに本教材の重要性が見出される。

子どもらしい自然觀照の文である。最初のオチバヒロヒに行くところには、この學年の兒童の落葉拾ひを樂しむ心が見え、「キイロナハヤ、マツカナハガ、タクサンオチテキマス」には色彩の美と、落葉に明かるくなつた林が想像され、「カサカサ」といふ音には林の中の靜けさを感じられる。きぬ子が「キイロナハ」を目にすかして見ることに、花子が押葉にしようとする思ひつきとがこの文の要點で、そこに理科的の觀察や處理がある。

なほきぬ子の拾つた「キイロナハ」、花子の拾つた「モミヂノハ」は、それぞれ前節の「キイロナハ、ヤ、マツカナハガ、タクサンオチテキマス」に照應する。文末の「小トリガチチチトナイテキマス」は「アルクト、カサカサ

音ガシマス」に照應して、林の中の静けさを具象化してゐる。

### 取扱の要點

読むこと 發音を正して讀みを指導する。全體に亘つてゆつくり讀ませ、讀みながら靜かな氣分を味ははせることが大切である。

文字語句を指導し讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章挿畫挿圖を中心とし、兒童の體驗と結んで次のやうな問によつて話合をさせる。

「おちばを拾ひに行つたことがありますか。」

「どんな葉を拾ひましたか。」

「それをどうしましたか。」

「きぬ子さんと花子さんはどこへ行きましたか。」

「何をしに行きましたか。」

「どんな葉が落ちてゐましたか。」

「歩くたびにどんな音がしましたか。」

「きぬ子さんはどうしましたか。」

「きぬ子さんは何といひましたか。」

「花子さんはどんなことをしましたか。」

「小鳥が何といつて鳴いてゐましたか。」

「この文を讀んでどんな氣持がしますか。」

書くこと コトバノオケイコ十七頁(一)によつて文字を正確に書かせる。「林」中「音」見「小」等の書き方に注意を要する。なほ時間に餘裕があれば、全文または一部を書寫させる。

文字の指導 新字を中心に指導する。「行」の如き動詞の漢字は、「イ」クと終止形を示して確實

にしておくことが大切である。

コトバノオケイコ十八頁(二)によつて、「ヒロヒ」「キマス」「見エマス」「キコエ」のカナヅカヒに注意する。

ことばの仕事 コトバノオケイコ十九頁(三)によつて葉の名をいはせ、繪に色を塗らせる。葉は「オブラ」「もみぢ」「いちやう」である。

### 注意すべきことば 文字 語句 語法等

アクセント

ハ(葉)ガ——ハガ ハ(庭)ガ——ハガ

矯正すべき訛音方言

キイロナ——「キイナ」「キナイナ」などの方言を矯正する。

ハ「ハ」といはいないやうに注意する。

タクサン——方言が多い。注意して指導する。

小トリ——「コドリ」と濁らないやうに注意する。

## 文字

新字——林 行キ 音

## 語句語法

「スカシナガラ」は挿莖と関係づけ動作化することによつて理會させる。

「キイロナハ」「マツカナハ」「キイロナ」「マツカナ」等の形容的修飾語の用法を文例によつて指導する。

「カサカサ」「チチチチ」等の擬聲的な副詞的修飾語に注意して、林の中の情景を考へさせる。

アルクト、カサカサ音ガシマス。

小トリガ、チチチチトナイテキマス。

## 備考

### 連絡

自然の觀察二「もみぢ、エノホン二」「ハナナラベル、カズノホン二」(雑題(九十頁)落葉(十一頁)と  
關聯して取扱に考慮する。

## 九 イモヤキ

### 教材の趣旨

自然に親しむといふ點で前課と聯關する教材である。畠のがたづけに一家總出であたり、木の枝や枯草などをひとところに集めて焼くと、煙は悠々と立ちのぼり、畠一面を包んで行く。弟はこれを煙幕に見立てて興がり、母の焼いてくれるおいもを喜ぶ。隣家の子兔を見に行き、歸つて焼けた香の高いおいもをおいしくたべる。素朴な中にもみんなで働く温かい家庭生活があり、自然に親しむ一家の喜びのあることを感得させるべきであるが、敢へて本教材を田園生活と限つて指導すべきでなく、兒童の環境に即應して適當に取扱ふことが大切である。

### 文章

おとうさん、おかあさん、ぼく、弟の四人の活動を通して事象が表現さ

れてゐる。

「ケフハ、ハタケノカタツケヲシヨウ」といふ父のことばで、筆を起し、直ちに事象の中心に迫つて行つてゐる。それによつてみんなが動き、木の枝や枯草を集める。父が火をつけても燃えなかつたのが、母の坎なくづで燃出したあたりは、見方がよく行届いてゐる。弟が「エンマクダ、エンマクダ」といつて喜ぶのは、幼い子どもの主體的な心の表現である。

いもやきの一條に至つて、兄は兄らしく、弟は弟らしい様子がはつきり出てゐる。煙を煙幕だといつた弟が、「早クヤケナイカナ」といふのもかはいらしいし、それを受けて「ソシナニ早クハヤケナイヨ」と答へることばには兄らしい落着きが見られる。

いもの焼ける間、子兔を見に行くのは表現の變化であり、「ウサギノ子ハ、五ヒキキテ、ヒトカタマリニナツテキマシタ」にも自然に對する親しみの心が具象化されてゐる。

いものことを思ひ出して再び島に歸ると、「オイモノニホヒガ、オイシサウニシテキマシタ」は感覺的な、しかも野趣に富んだ表現であり、「ドレ、ドレ」や「ケタ、ヤケタ」は、父の動きと慈愛とが一つになつたやうなことばである。「オカアサンが、大キナオイモチニツモツテ來テ、灰ノ中ヘオ入レニナリマシタ」と照應して、父母の愛を感じさせるべきである。

### 取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導する。對話の部分は特に氣持を生かすやうに讀ませる。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章挿畫掛圖を中心とし、次の如き問によつて話をさせる。

「おとうさんが何といひましたか。」

「みんなはどうしましたか。」

「島へ出て、みんなでどんなことをしましたか。」

「おとうさんは、どうなさいましたか。」

「火はどうなりましたか。」

「その時、おかあさんはどうなさいましたか。」

「枯枝や落葉をかぶせるとどうなりましたか。」

「弟は何といひましたか。」

「おかあさんがおいもを灰の中へお入れになつた時弟は何といひましたか。」

「ぼくといつてゐる子どもは何といひましたか。」

「それからどこへ行きましたか。」

「鬼の子はどうしてゐましたか。」

「おいものことを思ひ出してまた畠へ行くとどんなにほひがしましたか。」

「おとうさんはどうなさいましたか。」

「兄弟はどうしましたか。」

書くこと コトバノオケイコ十九頁(一)によつて文字を正しく書かせ、また書取をさせる。

文字の指導 新字を中心として指導する。『弟は字形と筆順に注意を要する。また、火は「日」と混同しやすいためから字義を明瞭にして區別させるやうにする。

コトバノオケイコ二十頁(二)によつて□の中に正しいカナを記入させる。

ことばの仕事 コトバノオケイコ二十頁(三)によつて、ノデ「アチラコチラ」ケレドモを用ひて話をさせ、又短い文を綴らせる。

#### 注意すべきことば 文字 語句 語法等

#### 矯正すべき訛音方言

ショウ——「ショ」といはずはならない。「ショ」と發音させる。

アツメマシタ——「アツベマシタ」といはずはないやうに注意する。

エンマク——「イエンマク」といはずはないやうに注意する。

ソナニ——方言が多い。矯正を要する。

灰——ハエ(蟻)と混同し、又は「フエ」「ヘ」などと訛る地方では矯正する。

#### 文字

新字——弟(オトト) 火(ヒ) 消(ス)

#### 語句 語法

「エンマク」「ヒトカタマリ」に就いては多少説明を要する。「ドレ、ドレ」は感動詞で、思ひ立つて事をする時の聲であることを文章に即して指導する。

次の如き敬語に注意する。

火ヲオツケニナリマシタ。

カンナクヅヲモツテオイデニナリマシタ。

灰ノ中ヘオレニナリマシタ。

「オカアサンモボクモ、弟モ、ハタケニ出マシタ」によつて助詞「モ」の用法に注意する。

## 備考

## 連絡

自然の觀察二、落葉かきと關聯して取扱ふ。

## 十　コ、モリウタ

## 教材の趣旨

殆ど全國的にうたはれる子守歌で、傳統のかをりの高い教材である。藝能科音楽と緊密に連絡する。

をさなこの夢のやうな時代に、一生を通じて腦裡に深く刻みこまれるものは子守歌である。慈愛深き母の手に抱かれながら、夢心地に聞く歌聲は、をさなごにはどんなに心地よく聞取られるであらう。それは甘美な音楽であり、天使のささやきである。教材は、兒童をして過去の夢の世界に遊ばせ、懐かしい思出に童心を新たに蘇らせるところに

主眼がある。

## 文章

八五、三聯の形式であるが、時に八六、七六がまじつてゐる。しかし全體として韻律には變りはない。

第一聯は子守歌の主題で、「ウヤハヨイ子ダ、ネンネシナ」とやばらかな命令の形の上にできあがつてゐる。子守歌は「ねんねこうた」ともいはれるが、「ネンネン」は「ね(寝)」を重ねた幼兒語である。「コロリヨ」はこりとねる意味で、「オコロリヨ」は繰返しである。

第二聯と第三聯には子どもが里歸りをした子守を慕ふ心と、土産をもらつて喜ぶ心があらはれてゐる。歌は問答の形の上に成立ち、うとうと眠りかけるをさなごに、問ひつ答へつ楽しい夢路に入らせる構想である。「ドコへ行ッタ」「ナニモラッタ」は「ドコへ行ツタカ」「ナニヲモラッタカ」の意で、「里へ行ツタ」の肯定と異なるものがある。

本教材は、傳統的な歌詞であり、今日の生活事情とおもむきを異にす

るものもあるから、讀ませることを主とし、敢へてさういつた意味の詮索に深入りすべきでない。

#### 取扱の要點

讀むこと 韻文であるから特に發音を正しく指導し、韻律を生かして讀ませ、暗誦に導くやうにする。また藝能科音楽と連絡し、歌唱により歌詞を十分兒童のものとなさせる。コトバノオケイコに於いては、本課からヒラガナを提出することになつてゐるから、歌詞を十分暗誦させておくことが豫備的工作として肝要である。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと、相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 兒童の記憶にある子守歌を思ひ出させ、これに關聯する過去の淡い記憶について話をさせる。

書くこと コトバノオケイコ二十二頁によつて文字を正確に書かせる。

文字の指導 新出の漢字及び次にいふやうにヒラガナ文字に就いて指導する。「里」は筆順に注意する。

ヒラガナの指導 ヒラガナは初等科一年の後期からコトバノオケイコによつて提出することになつてゐる。コトバノオケイコ二十頁(一)には本課の全文がヒラガナで提出してある。歌詞の暗誦を利用してまづ讀みの指導をするのである。「コモリウタ」の歌詞はもう暗誦さ

れてゐるはずであるから、この暗誦を利用してヒラガナの文を讀ませ、自然にこれに親しませて學習をさせる。随つてこのヒラガナ文は、兒童に直ちに讀ませるやうにし、讀めないところは歌詞を思ひ出させて指導する。ヒラガナを書くことはコトバノオケイコ二十二頁(二)の山こえて里へ行つたの文によつて、「あ」「の」「こ」「え」「て」「へ」「つ」「た」の八字を指導する。

ヒラガナに就いては、讀むことと書くことを要求するが、まづ(二)の如く書く文字を中心として指導し、(一)に提出されたその他のヒラガナは讀みかただけに止めておく。毎課このやうにして書くことを指導し、全體に及ばして行く。「里へ行つた」の如く、轉呼音及び促音の文字を最初に指導するのは、負擔が重いやうであるが、轉呼音や促音はカタカナで既に指導し終つてゐるから、ここではヒラガナに置換へるに過ぎない。即ち専ら文字を指導することを要點とする。ヒラガナは字形が困難であるから、書き方は特に字形筆順に注意して指導する。因みにヒラガナ文がヨミカタにはじめて提出されるのは十五、お正月である。

なほコトバノオケイコ七十二三頁にヒラガナ五十音圖表並びに濁音表を掲げた。これはヒラガナの總練習と五十音圖練習のためであるから、ヒラガナの指導に伴ひ、隨時必要に應じてこの圖表を利用し、練習に力めなければならない。

五十音圖の指導に就いては、ヨミカタ一教師用書四十四、カタカナ圖表に詳述してあるが、ヒラガナの指導とともに五十音圖をいつそう確實に記憶させることが肝要である。五十音

圖は發音指導を始め國語學習の基礎となるものであるから時々これが練習をなすやうに力める。特に兒童の陥りやすきは各行の順序を誤ることと次の各行の文字あ行(いえ)おや行(い)えわ行(え)を等を混同することである。

發音の練習をなすには五十音の行の読み方に止めずあ列い列う列え列お列等各列の読み方を徹底させることが肝要であり、各行の順序もこれによつて確實になる。あ行や行わ行の文字の混同についてはよくその正否を指導して記憶させるやうにする。五十音圖の練習はややもすれば初學年のみに限られ上學年に於いては全く顯みられない實情にあるが、これは大いに反省すべきことで第二學年以上に於いても隨時これが練習をなし確實にさせる必要がある。

### 注意すべきことば 文字、語句語法等

#### 矯正すべき訛音方言

コロリヨ——ラ行音を正しく發音するやうに指導する。

モラッタ——「モロータ」といはいやうに指導する。

デンデンタイコ——「デンデンタイコ」ともいふ。

#### 文字

漢字

新字——里

ヒラガナ——あのこえてへつた

#### 語句語法

「ネンネンコロリヨ、オコロリヨ」は「コフヤケコヤケ」「タイコバシコバシ」と同様、童謡に一般的な反復的修辭であつてあまり意味を詮索すべきでなく寧ろ讀んで調子を味はふやうに指導すべきである。「ドコへ行ッタ」は「ドコへ行ツタカ」の意味で問であり、「里へ行ッタ」はそれに對する答である。「里ノミヤゲニナニモラッタ」「デンデンタイコニシャウノフエ」も同様の語法である。

#### 備考

#### 連絡

ウタノホン上「コモリウタ」と連絡して取扱ふ。

(以上十一月)

## 十一 オイシャサマ

## 教材の趣旨

人形を中心とし、お醫者遊びを主題とした教材である。卷一の「デンワソビ」に出發した模倣遊戲で、本卷の「兵タイゴッコ」へ發展し、更に卷三の「うさぎとたぬき」へ移行する過程をなすものである。

自分や家人の病氣の際、醫師に診察してもらつたことは多くの兒童の體驗したことである。かうした場合に見た大人の生活を模倣して劇的に活動する場面を表現したのが本教材で、機構も自ら劇的になつてゐる。この模倣本能こそ子どもを大人に成長させる一要件であり、教育上見のがすべからざる價值を有するものである。かうした遊びの間に兒童は母となり醫師となつて、言語動作が自ら訓練され、特に國語の實踐的な指導が行はれるのである。しかも本教材は一面に衛生

上の注意をも暗示してゐる。

## 文章

人形が病氣になつたといふのでお醫者を呼ぶ花子にも、大人の帽子をかぶり靴を持つてお醫者になる正男にも滑稽が感じられるが、二人とも大まじめである。「ゴ病人ハドチラデスカ」「アチラニネテリマス」大人の言語そのままの挨拶だけあつて、ことばが頗る丁寧である。このことばに伴なふまじめくさつた二人の動作も考へなくてはならない。正男と花子の言語動作は、すべて自分の經驗を基礎とした大人の生活の模倣である。正男は奥へ通され、人形の側に坐つて手を取つて脈を見、額にさはつて熱を見、お腹を押さへて病狀を考へる。それは當て正男が病氣の時、お醫者に診察された場面の再現である。また花子が人形の側に附添つて病氣を氣づかはしげに見守る態度は、花子又は弟が病氣の際枕頭に坐つて看護してもらつたおかあさんの模倣である。

ところで、如何にもまじめくさつて診察する正男を見ては、花子もいつしかおかあさんの立場を忘れて急にをかしさをを感じ出した。正男は依然大まじめで、タイシテワルクハナイヤウデス。タベスギデスネと診断を下した。この言動をきっかけとして花子はとうとう吹出してしまつた。それにつられて正男もまた笑はずには居られなかつた。本教材は、どこまでも遊びを楽しむ明朗な児童性に重點を置いて取扱はねばならない。

#### 取扱の要點

読むこと 發音に注意して読みを正しく指導する。全體に談話をするやうに讀ませることが大切であるが特に會話を生かして指導する必要がある。

文字語句を指導し、読むこと、話すこと、書くこと相俟つて読みを確實にする。

話すこと 文章挿畫掛圖を中心とし、兒童の體驗と結んで次のやうな問によつて話をさせる。

「花子さんは人形が病氣になつたので、どうしましたか。」

「正男さんはどんな風をして來ましたか。」

「二人は何といつて挨拶をしましたか。」

「正男さんはどんなにして人形をみましたか。」

「花子さんはそれを見てどう思ひましたか。」

「正男さんはていねいにみてから何といひましたか。」

「花子さんはどうしましたか。」

「正男さんはどうしましたか。」

「あなた方はお醫者さまにみてもらつたことがありますか。」

「お醫者さまはどうしましたか。」

「その時おかあさんはどうしましたか。」

また本課を劇的に取扱つて對話及び動作を練習する。地の文を読む手と花子と正男になる者をきめて讀ませると、容易にさうした取扱ができる。

文字の指導 新字讀替を中心に文字を指導する。「病」は「ヤマヒダレ」に特に注意を要する。

「氣」は米の筆順を誤りやすい。

ヒラガナの指導 コトバノオケイコ二十三頁(一)によつてまづ讀みを指導する。文は本文を要約したものであるから、ヨミカタの文章と關聯して讀ませ、讀み得ない文字は教師が進んで指導する。指導しないで徒にヒラガナの困難を感じさせるやう仕向けてはならない。

コトバノオケイコ二十四頁(二)によつて、漢字及びヒラガナ文字の書き方を指導する。  
ヒラガナは當分讀む字と書く字を區別し、書く字を中心として指導するやうに心掛ける。  
書く字の新字は次項文字欄にヒラガナとして明示した。

### 注意すべきことば 文字 語句 語法等

#### 矯正すべき訛音方言

カバン——「ガバン」といはいやうに注意する。

ソバ——「ネキ」といふ方言を矯正する。

手——「テ」といはいやうにする。すべてこの類の矯正には「テヲトリマシタ」の如く続け  
ていはいやうに矯正するがよい。

ヒタヒ——「シタイ」といはいやうに注意する。

スルノデ——「スルンデ」といふ地方もあるが、「スルノデ」を標準とする。

#### 文字

##### 漢字

新字——病<sup>ビョウ</sup>、氣<sup>キ</sup>、笑<sup>ハナイデ</sup>

讀替——人<sup>ヒト</sup>、ギヤウ、正<sup>マサ</sup>、曼<sup>マン</sup>、急<sup>イサ</sup>、キューニ

ヒラガナ——ざ、や、う、さん、ひ、まし

#### 語句 語法

「病人、病人」病氣を對照して敬語法に注意させる。又、「ネテヲリマス」「ネテキマス」を比較  
して、「ヲリマス」はていねいな言ひ方であることに注意させる。

#### 備考

##### 連絡

カスノホンニ「買物ごっこ」(二十頁)ウタノホン上「オ人ギヤウ」と連絡して取扱ふ。

## 十二 デンシャゴッコ

#### 教材の趣旨

前課に關聯した模倣遊戲で、電車ごっこを主題とした教材である。  
電車は幼兒の頃から玩具や繪によつて親しんでをり、特に電車のあ  
るところでは朝夕これを見たり乗つたりして興味を持つてゐる。

チンチンと合圖を鳴らし、轟々と疾走する電車の壯快さ、これを操縦  
する運轉手や車掌は子どもの憧憬の的でさへある。

本教材は前課と同様模倣遊戲であるが、團體的に行動するところに遊戲の發展性がある。運轉手となり、車掌となり、お客となつて、電車ごつこの面白さ楽しさに浸らせて行くところにこの教材の趣旨があり、一面交通に關する文化的道德的意義が暗示されてゐる。

### 文章

七七調を基調とし、二聯から成立つてゐる韻文である。

第一聯は發車前の瞬間を歌ひ、第二聯は進行が主として歌つてゐるが、電車の車掌になつた子どもの主體的なことばによつて全體が構成されてゐる。

第一聯でまづ役割がきまり、遊戲の人數が明らかにしてある。その間にも子どもらの得意な嬉しさが現れてゐる。

オノリハオ早く

ウゴキマス、チンチン

乗客に對する注意である。「早くお乗りください」「動くから氣をつけて

ください」の意味が含まれてゐる。「チンチン」は發車の合圖である。

第二聯は運轉手の技術を讚美し、電車の快速をたたへてゐるが、そこに電車に乗つた氣持になつてゐる子どもらの得意さが見える。

ツギハボクラノ學校前ダ

乗客を通學生と見立て、停留場を學校前と名附けて、兒童の實際生活に近づけたところに一段の興味がある。

オオリハオ早く

ウゴキマス、チンチン

「オオリハオ早く」は降車客に對する注意、「ウゴキマス」は乗客に對する注意、「チンチン」は前と同様發車の合圖である。

### 取扱の要點

讀むこと 本教材には、「ウンテンシュ」「シャシャウ」「オノリハオ早く」「オオリハオ早く」「ウゴキマス」等發音と韻律とに注意を要する語が多い。發音を正し韻律を生かして讀みを指導し、自ら暗誦へ誘導する。コトバノオケイコには全文がヒラガナで示されてゐるから、本文を

暗誦させることが必要條件となる。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 電車及び電車ごつこの體驗と結んで文章挿畫を中心に次のやうな問によつて話合をさせる。

「電車に乗ったことがありますか。」

「電車に乗りたいたと思ひませんか。」

「電車ごつこをしたことがありますか。」

「この子どもたちは何と何になつてゐますか。」

「オノリハオ早クは誰が誰にいつてゐることばですか。」

「この電車が早く走るのはどうしてでせう。」

「次の停留場は何といふ所ですか。」

「オオリハオ早ク、ウゴキマスは誰が誰にいつてゐることばですか。」

「電車はまだどうすると思ひますか。」

文字の指導 新字を中心として文字を指導する。

ヒラガナの指導 コトバノオケイコ二十五頁(一)によつて讀みを指導する。この歌詞はヨミカクで暗誦してゐるからそれを利用してヒラガナの讀みを練習させる。

書くことはコトバノオケイコ二十六頁(二)によつて文字を正確に書かせる。特にヒラガナは新字はいふまでもなく、既習の文字も注意して書かせる必要があり、また適宜書取をもさせる。

### 注意すべきことは文字語句語法等

矯正すべき訛音方言

ウンテンシュ——「ウンテンシュ」といはないやうに注意する。

キミ——「チミ」と訛る地方では矯正する。

オ客——「オチャク」といはないやうに注意する。

ウゴキマス——「イゴキマス」と訛る地方では矯正する。

文字

漢字

新字——オ客 學校(ガッコウ)

ヒラガナ——て お ナリ は く ご き ち

語句語法

「キミ」「ボク」「ボクラ」等の人名代詞は特に男兒を指名してお互にいはせ、その關係を明らかにする。「デン」シャノオ客は「デン」シャノオ客ダ「デン」シャノオ客デスと、「オノリハオ早ク」は

「オノリハオ早クネガヒマス」と對照して意味を考へさせる。

# 備考 連絡

ウタノホン上「デンシャゴッコ」と連絡して取扱ふ。

## 十三 ケンチャン

### 教材の趣旨

母のいひつけで、小さい弟を外へ連れて出た生活を敘述した教材である。

いたづら盛りの弟が母のそばでは何かとむづかり絡まるのを、母のいひつけによつて外へ連れ出し、近所の犬を見に行つたが、犬はゐなかつた。そこに軽い失望を感じたが、豫想しなかつた馬がゐたので、弟は「オンマオンマ」といつて喜んだ。如何にも子どもらしい様子が見え、ま

た優しい姉の心情の現れた生活的な教材である。観察・観照・未分化の教材であるが、特に愛馬の心に培ふ點は、國防上大切なことである。

### 文章

兒童の綴り方そのものを思はせるやうな文章である。綴る態度のやうやく養はれて來たこの頃の兒童には、恰好の模範文といへよう。

もちろんこの期の兒童の綴り方は、指導を怠ると多くは觀念的に記憶を羅列するに過ぎないのであるが、この態度を改め、生活を具體的に見て書くやうに指導することが大切である。本教材は、自分の生活をケンチャンといふ弟を中心として具體的に表し、しかも子どもらしい心情を如實に敘した文章である。

先づおかあさんの裁縫から起筆してある。

ケンチャンガソバへ行ツテ、ハリバコニサハッター、キレヲヒツパツ  
タリシマシタ。

ケンチャンのいたづらが、その動作の敘述によつてあらはされてをり、

綴り方としての見方を指導すべきところである。

お母さんはケンチャンのいたづらに困つて、キヌ子に「ケンチャンヲツレテ、ワンワンヲ見ニ行ッ、テチャウダイ」といつた。このことばの中に、幼児のワンワンを好む性情が出てゐるばかりでなく、綴り方としてはかうした會話を引用することを指導すべきところである。

お隣の前へ行つて「シロ」と呼び、「シロ」が居ないので失望を感じたが、この失望はやがて希望に轉換する。ツトムさんの家の前に馬を見出したケンチャンは、急に喜んで「オンマ、オンマ」と呼んでゐる。「オンマ」は寫音的にケンチャンのことばを模寫したものである。

馬ハ、ヲケノ中ヘカホヲ入レテ、カヒバヲタベテキマシタ。

タベナガラ、トキドキシッポヲフツテキマシタ。

ケンチャンハ、ニコニコシテ見テキマシタ。

ケンチャンの喜びと馬の動作とが一體となつてゐるところで、特に馬の見方が具體的であり、文としては全體の頂點をなしてゐる。

# 取扱の要點

讀むこと 生活に即した文章であつて、讀みは比較的容易であるから、この種の文章に於いて十分讀み方を練習し、朗讀を基礎づけることが大切である。それにしても語の發音が基礎であるから、その指導を怠つてはならない。殊に「馬」の發音はよく「ウマ」と誤られやすい。オンマと寫音的にした點も考慮しなければならない。

文字語句を指導し讀むこと、話すこと、書くことと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章挿畫掛圖を中心として、兒童の體驗と結んで次のやうな問により話合をさせる。

「おかあさんは何をしていたつしやいましたか。」

「げんちゃんはおかあさんのそばへ行つて、どんなことをしましたか。」

「そこでおかあさんは、きぬ子さんに何とおつしやいましたか。」

「きぬ子さんはお隣の前へ行つて何といひましたか。」

「シロは出て來ましたか。」

「げんちゃんときぬ子さんはどう思つたでせう。」

「つとむさんのうちの前に何がゐましたか。」

「げんちゃんは何といひましたか。」

「馬はどうしてゐましたか。」

「げんちゃんはそのを見てどんなにしましたか。」

「みなさんは馬を見たことがあるでせう。」

「馬がどうしてゐるところを見ましたか。」

「馬はかはいと思ひませんか。」

「何でもよく見てゐると、かはいくなるものだと思ひませんか。」

文字の指導 新字を中心にして指導する。「私」は「アギヘン」呼「馬」は筆順に注意する。

ヒラガナの指導 コトバノオケイコ二十八頁(一)によつて読みを指導する。ヨミカタの本文

と關係づけて平易に讀ませるやうにする。讀めない児童には特に指導することを忘れてはならない。絶えず讀みを反復させることが指導上大切である。

コトバノオケイコ二十九頁(二)によつて文字を正確に書かせる。特にヒラガナは新字はいふまでもなく既習の文字についても注意し適宜書取をさせる。

注意すべきことは文字 語句語法等

アクセント

スツテ縫——スツテ——スツテ——スツテ

矯正すべき訛言方言

キモノ——「キリモン」「キロモン」等の方言を矯正する。

チャウダイ——方言には同じ意味のいろいろな言ひ方があるから注意して矯正する。

馬——「ウマ」とはいない。「シマ」「guma」と唇に注意して發音させるやう指導する。

シッポ——「シッポ」と長くいふ地方では矯正する。

文字

漢字

新字——「私」呼「馬」

ヒラガナ——ろ と び が あ け い

語句語法

次の如き「タリ」の用法に注意する。

ハリバコニサハツタリ、キレヲヒツバツタリシマシタ。

「チャウダイ」は元來幼児語で、隨つて母親などが子どもに向かつて用ひる場合がある。本教材はその例に該當する。

## 十四 冬

教材の趣旨

七八

冬三題とも稱すべき教材で、一は池の水、二は雪降り、三は雪達磨を主題とする。三者に通ずるものは冬の感興である。

子どもに取つての冬の感興は、氷であり雪であつて、それがまた子どもには冬の象徴でもある。氷が始めて張ること、雪が始めて降ること、雪あそびをすることは、何れも子どもには清新な感興を呼び、無限の魅力を感じさせる。子どもは風の子といはれ冬を喜び迎へる。冬の観照は子ども独自の世界である。

文章

卷一の「ユフダチ」「オ月サマ」卷二の「オチバ」「イモヤキ」とともに、自然に親しみ、自然と遊ぶ兒童の生活の表現である。

(一)は愛らしい小品であつて、「ケサ、ハジメテ池ノ水ガコホリマシタ」の一句に強く冬を意識させてゐる。はじめて池に氷が張る、——子どもにとつては一つの驚異である。二三日來の寒さも想像され、いよいよ

冬になつたといふ感じを深めてゐる。「キンギョヤコヒ、ドウシテキルデセウネ」といふ小さい妹の淡い心配も、この氷に出發し、そこに妹のやさしい心情が出てゐる。「ドコカニカクレテキルノダラウ」——この一語には妹に對する兄らしさがある。「氷ガハツテ、サカナタチハサムイデセウネ」——妹のやさしい心は、金魚や鯉の思ひやりに一層深まつて行つてゐる。

池のさかなに思ひやりの深い妹は、雪降りの日には

雪ヤコンコ、

アラレヤコンコ、

竹ノハニツモレ、

松ノ木ニツモレ、

ドンドンツモレ。

と快活に歌ひながら、前掛けを擴げて雪を受けてゐる。雪の童謡は、古來傳唱された形式をもととして新たに發展させたものである。「コン

「コ」は「來い」の意といふ説もあるが、「米」の幼兒語と考へられる。即ち雪や霰を米にたとへたものである。

「雪ハ、アトカラアトカラフツテ來マス」は雪降りの全體的な敘述で、それをよく見れば、「ナカヨクナランデ、フツテ來ルノモ」あり、「オッカケッコヲシナガラ、フツテ來ルノモ」あり、「トンボガヘリヲシナガラ、フツテ來ルノモ」あるのである。

何れも主體的な兒童の心情に即した觀察であり表現であつて、雪降りに歡喜する心が現れてゐる。「モ」の助詞の並列的意義を知らせるのに適切なところである。

雪は見る見る積つて、雪達磨が作られるやうになつた。子どもはもうじつとしてゐられない。にいさんと二人で雪達磨を作ることになつた。文の前半はその作り方を順序よくしかも簡単に表したもので、大小二つの玉を作り、それを重ねて木炭で目と口とを附けてゐる。文の新味は後半の夜になつて雪達磨を見る部面にある。雪後の空は水

のやうに澄んで、月が一段と近えてゐる。その月光を浴びて、雪ダルマハドッカリスワツテゐる。月光に照らされる雪達磨——「ドッカリスワツテ」がこの場合の表現として力強く感じられる。

本教材は、前課と同様兒童の生活の表現であるから、綴り方と連絡して指導することが大切であらう。

#### 取扱の要點

讀むこと 本課の如き文章は最初から強ひて全課を通じて讀ませる必要はない。一章づつ讀ませて然る後に全課を通じて指導する。しかしこの三章には一貫した關聯があり主人公も同一人と見てよいから、常に相互の關聯に注意させて讀ませる。一はやさしい心持、二は輕快な氣分、三は幾分落着いた氣持で讀ませるやうに指導し讀むことによつて文の情味を自然に感得させて行く。

文字語句を指導し讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章挿畫掛圖を中心とし兒童の體驗と結んで次のやうな問によつて話をさせる。

「池の水がどうなりましたか。」

「それは何時のことですか。」

「妹は心配さうにして何といひましたか。」

「兄は何といひましたか。」

「それを聞いて妹はまた何といひましたか。」

「みなさんは氷のはつた池を見たことがありますか。」

## 二

「妹は雪が降つて來たのでどんな歌を歌ひましたか。」

「みんなで一しよに歌つてごらんさい。」

「歌を歌ひながら妹はどんなことをしましたか。」

「雪の降つて來る様子をいつてごらんさい。」

「雪の降る様子がいろいろ書いてありますが、この外にまだいろいろあるでせう。それを話してごらんさい。」

## 三

「雪達磨は誰が作りましたか。」

「その作り方を話してごらんさい。」

「皆さんは今までどんなにして作りましたか。」

「夜になつてどうしましたか。」

「雪達磨はどんなにしてゐましたか。」

「雪あそびのことを話してごらんさい。」

文字の指導 新字讀替の文字を中心に指導する。「氷」は「水」と比較して、「氷」を落さぬやう「氷」は「雪」と字義的に區別をし、「氷」はカタカナの「氷」よりやや大きく書くことに注意し、尤は動詞の終止形「ヒカル」とともに名詞形「ヒカリ」を授けておく。

ヒラガナの指導 コトバノオケイコ三十一頁(一)三十二頁(二)によつて讀みを指導する。(二)の雪の童謡は暗誦を利用して指導する。常に既習文字と關係づけて讀ませることに努力する。書くことはコトバノオケイコ三十三頁(三)によつて文字を正確に書かせる。特に「に」なを等は字形筆順に注意しなほ適當に書取させる。

ことばの仕事 コトバノオケイコ三十五頁(四)のことばによつて話をさせまたは短い文を書かせる。

## 注意すべきことば文字語句語法等

矯正すべき訛言方言

ハジメテ——「ハシメテ」といはいやうに注意する。

サムイ——「サア」の如き訛音を矯正する。

雪——「ジュキ」「スキ」などといふ地方では矯正する。

小サイ——「チンコイ」「チンチャイ」「コマイ」などいふ地方がある。矯正すべきである。

文字

漢字

新字——冬<sup>フユ</sup> 池<sup>イケ</sup> 蛛<sup>イト</sup> イモート 氷<sup>コオリ</sup> 雪<sup>ユキ</sup> 竹<sup>タケ</sup> 炭<sup>タン</sup> 口<sup>クチ</sup> 光<sup>ヒカリ</sup> ッテ

讀替——來<sup>キ</sup>ル 二<sup>ニ</sup>人

ヒラガナ——になるだま

語句語法

次の如き並列の文につき助詞「モ」の用法に注意する。

ナカヨクナランデ、フツテ來ルノモアリマス。

オツカケツコヲシナガラ、フツテ來ルノモアリマス。

トンボガヘリヲシナガラ、フツテ來ルノモアリマス。

なほ「トンボガヘリ」は宙返りのことであつて、飛行機の宙返りなどと結んで理會させる。「竹

ノハニツモレ、松ノ木ニツモレ、ドンドンツモレ」の命令は強い願望をあらはすものである。

「小サイノヲコシラヘ、テ大キイノニカサネマシタ」は「小さい何をこしらへて、大きい何にかさ

備考

連絡

自然の觀察二、冬の衛生、冬の天氣と連絡して取扱に考慮する。

十五 お正月

教材の趣旨

お正月を待ちわびる子どもの心持を主題とした童謡風な詩で、ヨミカタに於ける最初のヒラガナ教材である。

常に未來に生きる子どもにとつて、お正月ほど楽しく嬉しいものはない。お正月こそ子どもの樂園であり、天國である。

お正月が來るといつて、子どもは指折り數へて待つ。毎日のやうに、もう幾日寝たらお正月が來るかといつて待ちわびる。この心持がこ

の韻文の主題であつて、お正月につきものの景物である裏白とお餅と、寶船とによつて具象化されてゐる。

#### 文章

七五の二行詩で、三聯から成立つた童謡風の詩である。各聯の第一句は七六になつてゐるが、韻律には變りはない。

詩の意味は「お正月來い」に盡きてゐるが、そのお正月を山から來い、里から來い、海から來いといふところに新しい着想がある。一は山によつて裏白が聯想され、お正月のお飾りにする裏白を持つて來いといひ、二は里によつて餅が聯想され、おもちつきつきとんで來いといひ、三は海によつてお正月の寶船が聯想され、その寶船に乗つて來いといふのである。これらの表現によつて、傳統の久しい新年の情景が豊かに感じられるのがこの詩である。

#### 取扱の要點

讀むこと 最初のヒラガナ文であるが、そのヒラガナは既習の文字ばかりであり、反復も多い

から讀みに困難を感じることは少いであらう。發音に注意し韻律を生かして正しく讀ませ暗誦へ誘導する。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと お正月の遊びや行事等について話をさせ、楽しい氣分を起させる。教材については文章挿畫を中心とし次のやうな問によつて話をさせる。

「お正月にどこから來いといつてゐますか。」

「山から何を持つて來いといつてゐますか。」

「里からはどんなにして來いといつてゐますか。」

「海からはどんなにして來いといつてゐますか。」

「このうたはどういふ氣持を歌つたのでせう。」

「皆さんはこのうたを讀んでどんなに感じますか。」

文字の指導 新字讀替の文字を中心として指導する。「持」は將來、待と混同する文字であるから「テ」ヘンと字義とを關係づけて確實に指導する。「舟」は筆順に注意を要する。

ヒラガナの指導 コトバノオケイコ三十六頁(一)によつて文字を正確に書かせる。新字「か」「ら」「も」を始め既習文字「い」「う」「お」「き」等は特に注意して書かせることが大切である。

コトバノオケイコ三十九頁(二)の「いろは」を讀ませる。ここでヒラガナは讀みとして全部提

出されたことになる。「いろは」はお正月のかるた遊びに關係のあることを考へて應讀み得るやうにしておく。

#### 注意すべきことは文字語句語法等

##### 矯正すべき方言

來い——「ヨ」といふ地方では矯正する。

##### 文字

##### 漢字

新字——持つて お舟

讀替——お正月シヨীগツン

ヒラガナ——からじも

##### 語句語法

「お正月來い山から來い等の命令的句法について注意する。

##### 備考

##### 連絡

「ヨイコドモ上、シンネン、カズノホンニ」お正月二十五頁「ウタノホン上」お正月と連絡がある。

(以上 十二月)

## 十六 兵タイゴッコ

### 教材の趣旨

卷一の「エイタイサン」キヲツケに出發し遊びの中に國防精神を養ふ兵タイゴッコに發展する。本課は兵タイゴッコといふよりは役割や扮装を主題とした劇的意義が著しい。

兵タイサンは兒童の尊敬の的で遊びの間にも自ら歩兵となり騎兵となり砲兵となり工兵となつて夢中に喜ぶのである。殊に近代科學の粹である兵器を操縱する戦車兵や航空兵や輜重兵などは彼等の羨望措く能はざるところであらう。かうした遊戲の中に彼等は一かどの陸軍通になつて子どもながらに國防精神をはぐくんで行く。單なる知識として注入するのではなく兒童の情意をもととして、生活的に與へるところに本教材の特色がある。

本教材は、卷三の「軍かん」と關聯して陸軍の兵種的一端に觸れてゐるが、注意すべきことはなにも専門的な任務や戰術を説かうとするのでなく、兒童の眼に映じた兵タイサンの興味から、それぞれ兵タイサンに扮装して、あつばれ帝國の國防に任ずる子ども心を育てて行くところに重點をおく。また花子とゆり子が看護婦になるといつたことによつて、非常時に於ける婦人の務を幼な心に感ぜしめるものである。

## 文章

遊戲を劇的にあらはした文章である。劇としては卷一の「デンワアソビ」「オキョクアソビ」が最初のもので、卷二の「ウサギトガメ」「オイシャサマ」に發展し、本課では扮装する過程にまで進んで來た。かくて卷三の「うさぎとたぬき」の演技へ移行する。

表現は頗る單純なもので、同一形式の文が反復されてゐるだけであるが、ここに登場する子どもたちが、それぞれ工夫して武器を持ち、兵タイサンになりすますところに着想の妙が感じられる。今人物と扮装

と兵種をあげると次のやうである。

|     |            |       |
|-----|------------|-------|
| 勇   | オモチャノテツパウ  | ホ兵    |
| 正男  | 竹馬         | キ兵    |
| 太郎  | 竹ノツツ       | ハウ兵   |
| 次郎  | 小サイシャベル    | 工兵    |
| 正次  | 三リンシャ      | センシャ兵 |
| 秋男  | フリガミノグライダー | カウクウ兵 |
| 一郎  | オモチャノジドウシャ | シチョウ兵 |
| 花子  |            |       |
| ユリ子 |            | カンゴフ  |

玩具を巧みに武器に擬し、それぞれ得意になつて兵タイサンを名乗るところに感興が湧く。

文末の「兵タイゴッコ」の韻文は、ウタノホン上「兵タイゴッコ」の歌詞の一部をそのまま引用したもので、結局以上の人物が兵タイに扮装して

みんなて歌ひ出したものと見るべきである。「カタカタカタカタ」は機關銃の音の擬聲語であり、「パンパン」は主として小銃の音の擬聲語である。

#### 取扱の要點

讀むこと 對話が中心になつた文章であるから、なるべく話すやうに讀ませる。全體として發音を正しく指導することはいふまでもないが、人物と武器と兵器の名とは特ににつきり讀ませることが大切である。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。  
話すこと 兵タイゴッコの話をさせる。また文章挿畫挿圖を中心として次のやうな間によつて話をさせる。

「勇さんは何になりましたか。」

「歩兵は何を持つてゐますか。」

「勇さんは何を持つてゐますか。」

「さうして何といひましたか。」

以下同様の形式で話させる。

次にそれぞれ持つものを適當に用意させ、または作らせて劇的に話させる。歌詞は一齊に歌はせる。

文字の指導 新字を中心として指導する。「兵」「郎」の字形筆順、「工」と「カタカナ」「工」の區別に注意を要する。

ヒラガナの指導 コトバノオケイコ四十頁(一)及び四十一頁(二)によつて讀みを指導する。(一)は對話の部分だけをぬき出したもので結局全教材の要約になつてゐることに注意する。

コトバノオケイコ四十二頁(三)によつて文字を正確に書かせ、また適宜書取をさせる。「ゆ」「わ」「ふ」「せ」「め」等のヒラガナは字形もむづかしく頻度數も少いから、力めて練習させる。

#### 注意すべきことば 文字語句語法等

##### 文字

##### 漢字

新字——兵(ヘ)タイゴッコ 太郎(タロウ) 次郎(ジロウ) 工兵

ヒラガナ——ぼ よ ゆ わ ふ せ め

##### 語句語法

「本兵」「兵」「ハウ兵」「工兵」「センシヤ兵」「カウクウ兵」「シチョウ兵」「カンゴフ」等の語は挿畫と結びつけて指導する。「グライダ」は繪畫又は寫眞によつて指導する。

## 備考

「ボク」は「私」タチ」と比較させて、男子と女子の代名詞及び「タチ」の用法について注意する。

## 連絡

ヨミカタ「ヘイタイサン」キヲツケの發展として取扱に考慮する。  
ウタノホン上「兵タイゴッコ」と連絡して取扱ふ。

## 十七 ネズミノヨメイリ

## 教材の趣旨

「サルトカニ」花サカデヂイ」とともに、本巻中の三つの童話の一つである。一番の長篇であるが、形は反復によつてもとへかへる循環形式の上に成立ち、比較的單純なものである。

無住法師の沙石集に出てゐる説話を原據とするが、それを極めて具體的に書きあらはし、兒童の心情に適合させた教材である。元來これ

には寓意が存在するが、かうした具體的な表現によつて寓意は自ら潜んでしまふから、専ら話の興味を中心に取扱ふべきである。

挿畫は、この物語を繪卷物の如く展開して説話をいつそう具體的にしてゐる。

## 文章

長篇の童話であるが、話は次の六段に分れてゐる。

- 一、鼠の両親が、自分の娘を世界中で一番えらい人の嫁にやらうと考へた。
- 二、鼠のおとうさんはお日さまのところへ行つて、娘をお嫁にあげたいと申し込んで斷られた。
- 三、鼠のおとうさんは、雲のところへ行つて斷られた。
- 四、鼠のところへ行つても斷られた。
- 五、壁のところへ行つても斷られた。
- 六、世界中で一番えらいのは鼠だと思ひ、近所の鼠のところへ娘を嫁

にやつた。

この段落によつて話の筋を明らかにし、「ヨイムスメーオ日サマー雲ー風ーカペーネズミ」の如く板書して、これを明瞭にすることが大切である。

鼠の親は「コンナヨイ子ヲ、ネズミノオヨメサンニスルノハヲシイ。セカイ中デ一バンエライイカタノオヨメサンニシタイ」と考へた。これがこの説話の因由であり動機であつて、これによつて説話は展開する。鼠はまづお日さまのところへ行き、「セカイ中デ一バンエライイカタノトコロヘ、アゲタイ」と娘の縁談を申しこんだのであるが、お日さまは「セカイ中ニハ、私ヨリモットエライイ人ガキマスカラ」といふ理由で斷つた。そこで鼠はそのえらい人をたづねて、お日さまから雲へ、雲から風へ、風から壁へと順々に廻つたが、どこでもお日さまの場合と同様「セカイ中ニハ、私ヨリモットエライイ人ガキマスカラ」と斷られた。かうして同様な場面が四回繰返され、そこに反復形式の興味があり、次第に滑稽

をさへ感ぜしめて来る。

最後に鼠は壁のことばをそのままにうけて「ナルホド、セカイ中デ一バンエライイノハ、ネズミダ」と思ひこみ、終に娘を近所の鼠の嫁にした。鼠に出でて鼠に歸るといふ循環的な構想である。この説話の中には、身の程を知れとか、おのれから出たものはおのれに歸るとか、そのほかいろいろの寓意を感じしめるものがあるが、それらは寧ろ大人の感ずる興味であつて、兒童には強制すべきではない。

#### 取扱の要點

讀むこと 十一頁餘に亙る長文で、これを一氣に讀ませることは困難である。強ひて最初から全文を通讀させる必要はない。兒童の力に即應し、適當に段落を切つて讀ませ、次第に説話の興味を讀取らせるやうにする。全文を通じての讀みは、總括として取扱へば負擔も軽く、朗讀指導の目的も容易に達せられる。範讀を示したり組に別けて讀ませたり、登場人物になつて讀ませたりまた部分的に齊讀させたり、種々變化をつけて讀むことの指導を工夫することが大切である。

發音文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章挿畫掛圖を中心とし兒童の讀取つた説話を次のやうな間によつて話合をさせる。

「ねずみの赤ちやんはどんな娘になりましたか。」

「ねずみのおとうさんとおかあさんはどんなことを考へましたか。」

「誰のところへお嫁にやることに相談しましたか。」

「お日さまは何とおつしやいましたか。」

「そこで誰のところへ行きましたか。」

「その次は誰のところへ行きましたか。」

「その次は誰のところへ行きましたか。」

「おしまひに誰のところへお嫁にやりましたか。」

「それはどういふわけでやつたのでせう。」

「お日さまのところへ行つた時のお話をしてごらんなさい。」

「雲のところへ行つた時のお話をしてごらんなさい。」

「風のところへ行つた時のお話をしてごらんなさい。」

「壁のところへ行つた時のお話をしてごらんなさい。」

文字の指導 新字を中心として指導する。「生」「思」「吹」は何れも動詞として使用されてゐるが

ら、語尾に注意し終止形生マレル思フ吹クを授けておく。なほ「雲」「風」は筆順に注意して字形を正確に指導する。

コトバノオケイコ五十頁(三)によつてカナヅカヒを(助詞に注意させる。

ヒラガナの指導 コトバノオケイコ四十五頁(一)によつて讀みを指導する。文は説話を要約

したものであるから説話と關係づけて讀ませるやうにする。

書くことはコトバノオケイコ四十六頁(二)によつて文字を正確に書かせる。「ね」「み」「れ」「む」

等の新字の外に「を」「ひ」「め」等の既習文字についても字形筆順に注意を要する。

### 注意すべきことば 文字 語句 語法等

#### 矯正すべき訛音方言

コンナ——地方により方言が多いから矯正に力める。

セカイ——「シェカイ」の如き訛音を矯正する。

一バン——「エチバン」の如き訛音を矯正する。

アナタ——「アネク」といはないやうに注意する。

イクラ——「ナンボ」「ドシコ」などの方言を矯正する。

イバツテ——「エバツテ」の如き訛音を矯正する。

キンジョ——「キンジョ」と長く發音しないやうに注意する。

## 文字

漢字

新字——生マレシマレ 思ヒ 雲 風 吹キ  
ヒラガナ——ね ず み れ ば む

## 語句語法

「エライカタ」は「エライ人」と比較させて「カタ」が敬語であることに注意させる。

「ドウカ」「ナルホド」は大人のことはであるが、文に即して理會させるやうにする。「ケンジョ」はケンチャンの課の「オトナリ」と連絡して異同を明らかにする。

「アナタは私」と相對して用ひる代名詞であることを指導し、「キミ」「ボク」と比較してその用法に注意する。

「ソレハ」は次の如く文に即してその用法を指導する。

ソレハダレデスカ。

ソレハ雲サンデス。

ソレハ風サンデス。

ソレハカベサンデス。

ソレハネズミサンデス。

## 十八 シャシン

## 教材の趣旨

家族一同が寫眞をとつた日の様子を、戦地の兄へ知らせる文の形で、あるが、まだ書簡文として分化したものでなく、兄へ呼びかけての表現である。銃後の國民の出征軍人に對する慰問感謝の情が主題となつてゐる。

一家が揃つて寫眞をとつた時の様子を知らせるといふところに着想の面白さがある。戦線にある兄がかうした文を読み、後から送られる寫眞を見たら、どれだけ軍旅の情を慰めることか。家族の消息を知ることが、出征將士に取つて何よりの喜びであらう。しかも撮影當日の兄を想ふ一家の人々のやさしい心情は、文面に躍動してゐる。これこそ銃後の國民感情を代表するものといふべきである。

文章

厳密に書簡文として分化した形式のものでなく、兄へ呼びかけて書いた児童の生活の表現であつて、この種の文は卷三の「海」と關聯する。

セシチノニイサン、オゲンキデスカ。

ケフ、ミンナデシャシンヲウツシマシタ。デキタラ、スグ送りマス。

この一節には本文の要點がある。戦地の兄の安否をたづねることと、今日みんな撮影したとことと、寫眞ができたなら送るといふことと、この三點を含んでゐる。以下文末の一節を除いた他の部分は要するに撮影當日の様子を敘したものである。児童はどうかすると早合點して、既にできあがつた寫眞の説明であるかのやうに誤解しやすいから、特に注意して指導する。

撮影する時の一同の並び方を説明するところは、整然とした敘述になつてゐるが、祖父を中央に、その兩側に父母、その後には姉弟たちが並ぶところに家族的な長幼の序が見られる。

私ハ、セイガヒククテカホガ出ナイノデ、ハコノ上ニ立チマシタ。

このあたりから文は次第に躍動し、情景が生き生きとして来る。おばあさんの「コノシャシンヲニイサンが見タラ、ドンナニヨロコブコトデセウ」といふやさしい情味の籠つたことば、おとうさんの「シャシンニ、コエモウツルトイイガナ」といふ近代人らしい思ひつき、手ガミヲヤレバ、イイサ。ゲンキデ、オクニノタメニシツカリハタラケト、カイテヤラウ」といふ堅氣なおぢいさんのことば、しかもみんなの想ひは一つになつて、遙かな戦地の兄に集注されてゐる。挿畫と連絡してその日の一家の人々の様子が想像される。最後の毎朝にいさんの寫眞に向かつて「オ早ウ」と挨拶するところは思はずしんみりとする。この文を手がかりとして児童に慰問文を綴らせることは、綴り方との連絡上見逃してならないところである。

取扱の要點

讀むこと 發音を正し、明瞭に讀ませる。戦地の兄を想像させ、その兄に手紙を送つた弟の氣

持で讀ませることが大切である。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと、相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 兒童の今まで経験した出征軍人に對する慰問について話をさせ、文章挿畫掛圖を中心にして次のやうな問によつて話をさせる。

「この文は誰に送つたのですか。」

「今日みんなで何をうつしましたか。」

「寫眞をうつした時の並び方を話してごらんさい。」

「その時おばあさんは何とおつしやいましたか。」

「おとうさんは何とおつしやいましたか。」

「おぢいさんは何とおつしやいましたか。」

「この子どもは毎朝どんなことをしますか。」

「戦地のにいさんがこの手紙を讀んだり寫眞を見たりしたら、どんなに思はれるでせう。」  
文字の指導 新字を中心として指導する。「送」立はともに動詞として使用されてゐるから語尾に注意し終止形(オクルタッ)を授け、字形筆順に注意して正確に書かせる。

コトバノオケイコ五十三頁(三)によつて「お」のカナヅカヒに注意する。

ヒラガナの指導 コトバノオケイコ五十頁(一)によつて讀みを指導する。兒童は次第にヒラ

ガナの文章を讀むことに慣れて來たとは思はれるが、なほ個別的にその力を検討し、薄弱な兒童には特別に注意して指導することを忘れてはならない。

書くことはコトバノオケイコ五十一頁(二)によつて指導し、なほ適宜書取をさせる。書寫については、新字はいふまでもないが、既習のものも絶えず字形筆順等に注意して次第に正確に書くやうにさせる。ここでは「ま」「ら」「す」等に注意を要する。

#### 注意すべきことは文字語句語法等

矯正すべき訛音方言

デキタラ——「デケタラ」と訛る地方が多い。矯正を要する。

ヒククテ——東京では「ヒククッテ」といふ傾向があるが、「ヒククテ」を標準とする。

文字

漢字

新字——送り 立ち

ヒラガナ——ち ぐ

#### 語句語法

次の文によつて敬語法に注意させる。

オヂイサントオバアサンガオカケニナリゾノワキニ、オトウサントオカアサンガオカケ

## 備考

ニナリ、ウシロニ、ネエサント私が立チマシタ。

## 連絡

ヨイコドモ上「私ノウチ、エノホンニ、オウチノ人々」と連絡して取扱に考慮する。

## 十九 カゲエ

## 教材の趣旨

冬の夜、子どもが影絵に興ずる平和な家庭生活の一断面を描いた教材である。影絵を見せてもらつて喜ぶばかりでなく、自ら影絵を工夫するところに本教材の精神がある。

「チヂサン」は子どもと同居する叔父と見てもよく、また時折遊びに来る人ともよい。「コンヤモマタ、カゲエヲシテ見セテクダサイ」や「早くセンドウサンヲ見セテクダサイ」によつて、これまで度々影絵を見せ

てもらつてゐることがわかる。

ここに出してある影絵は、犬狐、鳶船頭であるが、これらの指の組方は挿畫と連絡して指導し、児童にもやらせてみる。特別教室はなくとも、教室に差込む日光を利用すれば實際にやらせることは容易であらう。子どもの工夫したお月さまが雲から出る影絵の着想を感じさせ、児童にも影絵を工夫考案させるやうにする。

## 文章

對話のみから成立つた文章である。「ウサギトカメ」「兵タイゴッコ」と一聯の脈絡を有する對話教材で、劇的演出に導くに適してゐる。

地の文はないが、對話全體から子どもの家の居間であることが想像され、對話には身振や動作が伴なつてゐることが考へられる。

「サア、犬デス。ワンワン。」

「コンドハキツネ。コンコン。」

「ワンワン」「コンコン」の聲に伴なつて、影絵の口が開いたり閉ぢたりす

ることに注意する。この邊チヂサンの説明の極めて簡潔なのが影繪のはたらきを生かし、「コンドハキツネ」と言ひ切つて、「デス」を省いてゐる。後半の對話は新しい影繪の説明になるから、その調子がやや變つて来る。「コンドハ、私ガヤツテミマセウ」にまづ子どもの創造的意欲が見られる。以下對話の主客が顛倒して子どもは常に能動的に、チヂサンに働きかけ、チヂサンは受動的になつて影繪を考へさせられてゐる。あたかも謎をとくやうな問答になつて、影繪の興味がいつそう深まつて来る。最後の「オ月サマガ雲カラ出テ來ルトコロデス」は全く意表に出た奇抜な答で、この文の頂點をなしてゐる。

なほ子どものチヂサンに對することばはすべて「見セテクダサイ」「ヤツテミマセウ」「イイエ、チガヒマス」の如く敬語を用ひてゐるが、チヂサンのことばは、「ナニチャルカナ」「ノセテキルネ」「チキウダラウ」の如く常體になつてゐる。また對話の中には、「ハイ」「ホウ」「サア」「イイエ」の如きことばが多く用ひられてゐるので、對話が生き生きとしてゐる。「サア、

大デス」の「サア」はさあと誘ひだす意であり、「サア、ナンダラウ」の「サア」はややためらふ意であり、「ホウ、ナニチャルカナ」の「ホウ」は感じて驚く意である。

#### 取扱の要點

讀むこと 發音を正し對話の調子をあらはすやうに讀ませる。通讀し得るやうになつたら場面や人物を想像させて讀ませ、更に役割をきめて劇的に讀ませるやうにする。文字語句を指導し讀むこと、話すこと書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章挿畫掛圖を中心とし兒童の體驗と結んで次の如き問によつて話合をさせる。影繪をしたことがありますか。

「どんな影繪をしますか。」

「誰に教へてもらひましたか。」

「この文では誰が影繪をしてゐますか。」

「子どもがチヂサンに影繪を見せて頂くのはこれがはじめてでせうか。」

「はじめてでないといふことがどうしてわかりますか。」

「チヂサンはどんな影繪を見せてくださいましたか。」

「みんなで指を組んでやつてごらんなさい。」

「それから何を見せてくださいましたか。」

「こんどは子どもがどうするといひましたか。」

「子どもは手の上に何をのせてゐますか。」

「その影繪をラヂサンは何だといひましたか。」

「子どもがイイエチガヒマスといふと、ラヂサンは又何といひましたか。」

「さうすると子どもは何といひましたか。」

「手の上にゴム毯をのせて、お月様が雲から出て來るところといったのはおもしろい思ひつきですね。皆さんも一つ影繪を考へてごらんなさい。」

ヒラガナの指導 コトバノオケイコ五十四頁(一)によつて讀みを指導する。ヨミカタの文の前半がヒラガナで提出してあるから、その文と連絡して指導する。

コトバノオケイコ五十五頁(二)によつて文字を正確に書かせ、適宜書取をさせる。「ぬ」は字形も筆順も困難であり、頻度數も少いから、よく注意して書かせる。

コトバノオケイコ五十六頁(三)によつて前課と比較して、「を」と「お」のカナヅカヒに注意する。

注意すべきことは文字語句語法等

矯正すべき訛音方言

トビ——「トンビ」「トービ」「トーヒ」などといはないやうに注意する。

クチバシ——「クチバシ」といはないやうに注意する。

イイエ——地方によつて方言が多い。何れも矯正を要する。

文字

ヒラガナ——げ あ ぬ

語句語法

「ハイ」と「イイエ」の用法について指導する。その他「ホウ」「サア」の感動詞に注意する。

「サア犬デス」のサアは「サア、ナシダラウ」のサアと意味の違つてゐることを文に即して理會させる。

「チキウ」は地球儀を示して理會に導く。

備考

連絡

自然の觀察二「日なたと日かげ」と連絡して取扱ふ。

(以上 一月)

二十 日本のしるし

教材の趣旨

皇國日本の姿を、日の丸の旗、富士の山、君が代の歌によつてあらはした韻文である。

日の丸の旗、富士山、君が代の歌の三者はいはば皇國日本の象徴であつて、その崇高性、尊嚴性、發展性を通じて具體的に日本精神を感得せしめようとするのが本教材の趣旨である。なほ本教材は紀元節の前後に於いて取扱ふのであるから、儀式の莊重感と結んで指導することが大切である。

日の丸の旗はヨミカタ卷一の「ヒノマルノハタ」、ヨイコドモ上の「テンチャウセツ」、ウタノホン上の「ヒノマル」、エノホン一の「ハタ」及び「ハタヲアゲル」等に出てゐて、教材としても既に兒童に親しみの深いものである。

文章

富士山はヨミカタ卷一の「ハヤシサンガ、フジサンノエヲカキマシタ」に始り、卷四「富士山」、うたのほん下「富士の山」へ發展するもので、兒童の憧憬して措かぬ山である。「君が代」はウタノホン上で學び、天長節明治節新年等の儀式に度々奉唱する歌で、卷三「二重橋」にも見えてゐる。

定型詩ではあるが、各句の音數は必ずしも一樣でない。大體八五、八七を基調とし、その八は時に九または七になり、七は五になつてゐることがある。しかも全體として韻律の統一感には變りがない。

各聯ともに次の如き類似の句を以て起してゐる。

日本のしるしにはたがある。

日本のしるしに山がある。

日本のしるしにうたがある。

この「はた」「山」「うた」を受けて、それぞれ、朝日をうつした日の丸のはた。

すがたのりつばなふじの山。  
 ありがたいうた君が代のうた。  
 と歌ひ各聯の變化を見せてある。なほ次の如き重韻もこの詩を讀んで著しく感じられる點である。  
 はたがある。……日の丸のはた。  
 山がある。……ふじの山。  
 うたがある。……ありがたいうた、君が代のうた。

取扱の要點

讀むこと 發音を正し韻律を生かしてゆつくりと讀ませ莊重な感じをあらはすやうにさせる。つとめて朗讀させ暗誦に誘導する。  
 文字語句を指導し讀むこと 話すこと 書くこと 相俟つて讀みを確實にする。  
 話すこと 文章を中心とし次の如き問によつて語合をさせる。  
 「あなたがたの家のしるしは何ですか。」(家の紋)  
 「この學校のしるしは何ですか。」(帽章校旗校歌等)  
 「日本のしるしは何がありますか。」

「日の丸の旗はどんな旗であると歌つてありますか。」  
 「日の丸の旗がひらひらしてゐるのを見るとどんな氣持がしますか。」  
 「富士の山はどんな山だと歌つてありますか。」  
 「君が代を歌ふ時はどんな氣持がしますか。」  
 文字の指導 新字を中心として指導する。  
 ヒラガナの指導 コトバノオケイコ五十七八頁によつて書寫させる。ヒラガナ「は」の字形筆順を指導し又「を」「た」「あ」「す」「ふ」等にも注意する。なほ適宜書取をさせる。  
 注意すべきことは文字語句語法等

文字

漢字

新字——朝日 日の丸 君が代  
 ヒラガナ——は

備考

連絡

ヨミカタ「ヒノマルノハタ、同二」ラジオノコトバ、ウタノホン上「キミガヨ」及び「ヒノマル」に連絡して取扱ふ。

# 二十一 花サカデヂイ

## 教材の趣旨

いはゆる五大童話中でも最も勝れた部類の童話である。特に前課と關聯して我が國の國華たる櫻の花に關係があり、滿山の枯木に一度に花を咲かせるといった日本的な性格があることに注意すべきである。

二人のお爺さんを登場させた對照形式の童話であるから、自然善人と惡人との對立となり、勸善懲惡を主題としてゐるが、兒童には説話そのものの興味に重點をおいて取扱ふべきである。教材に於いても、最初から善いお爺さん、悪いお爺さんと限定せず、犬ヲカハイガッテオヂイサンと、トナリノオヂイサンとし、その行動によつて性情が表れるやうにしてゐる。兒童はこれを讀んで、善良な花さかぢいさんに幸

運が惠まれ、怨の深い隣の爺さんに惡運が酬いたことを自然と感得するであらう。

## 文章

長篇であるが、常に善人と惡人とを對照して反復的に敘述されてをり、構成は比較的簡單で、自ら次の三段にわかれる。

第一段では、花さかぢいさんが犬がないたので畠を掘つてみると、オカネヤタカラモノガタクサン出マシタ」といひ、これに對して隣のおぢいさんはそれを羨ましがつて犬をなかせて畠を掘ると、キタナイモノばかり出マシタ」と、同一行動をくりかへしながら反對の結果が生じたことを對照させてゐる。

第二段では、花さかぢいさんが臼で米を搗くと、また、オカネヤタカラモノガタクサン出マシタ」といひ、これに對して、隣のおぢいさんは臼を借りに來て米を搗いたが、キタナイモノばかり出マシタ」と、これも同じ行動から出た反對の結果を對照させてゐる。

第三段では、花さかぢいさんが、もらつて來た灰をまくと枯木に花が咲き、殿様から「コレハフシギダ。キレイダ」とほめられ、ごほうびまでもらつたに對し、隣のおぢいさんは灰をまいたが花が咲かなかつたので、殿様から「コレハニセモノダ。ワルイヤツダ」と咎められて縛られた。

これも同一行動のくりかへしが反對の結果を生んでゐる。

かうしてこの説話は、常に同じ行動が反復されながら結果は反對になつて善因に善果が酬い、惡因に惡果がめぐつて來たことが對照的に敘せられてゐる。

花さかぢいさんは、かはいがつてゐた犬が殺されると大層悲しみ、墓を造つて松の木を植ゑ、それで白を造る善良なおぢいさんである。また犬を殺され、白をこはされ火にくべられても怒りもせず、その灰をもらつて來て「花サカヂヂイ、花サカヂヂイ。カレ木ニ花ヲ咲カセマセウ」と呼んで歩く素直で樂天的な性質を持つてゐる。これに反して隣のおぢいさんは、徒に人の幸運をうらやみ、人眞似ばかりする慾の深い男

で、しかもいざといへば犬を殺し、白をこはして焼く短氣者である。この二人の性質が、その行動と共に對照的に具體化されてゐるのである。説話の構想の反復に伴なつて常に同じ語句の反復があり、兒童に對する興味と練習の手がかりになつてゐる。

### 取扱の要點

讀むこと 長文であるから始めは適當に分節して讀ませ、讀みが進んでから全體を通じて讀ませるやうにする。發音を正しくし、話の筋をよく讀取るやうに指導し、讀みに變化を與へて單調に陥らないやうに工夫する。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章挿畫掛圖を中心として話をさせる。長い話であるから全體的に筋を把握させるやうにする。また一部分をくはしく話させてもよい。挿畫を利用して紙芝居のやうにして話させ、また劇化して對話させるのもよい。

文字の指導 新字を中心として指導する。「土」「米」は筆順に、「咲」は偏旁を間違へないやうに注意する。なほ「咲」は動詞として用ひられてゐるから終止形「サク」を授けておく。

ヒラガナの指導 コトバノオケイコ五十九頁(一)によつて讀みを指導する。この文は自ら説

話の要約となつてゐる。

書くことは、コトバノオケイコ六十頁(二)によつて文字を正確に書かせる。「ほの新字の外」を「ら」「れ」「お」等の既習の文字についても字形筆順に注意する。

### 注意すべきことは文字語句語法等

アクセント

カッテ(飼)——カッテ カッテ(買)——カッテ

### 矯正すべき訛音方言

ザル——「ジャル」その他方言が多いから矯正する。

目——「メ」と長いはいないやうに指導する。

文字

漢字

新字——「島」<sup>シマ</sup>「土」<sup>ツチ</sup>「話」<sup>ワタ</sup>「米」<sup>コメ</sup>「咲」<sup>サキ</sup>「オ通り」(オトリー)

ヒラガナ——「ほ」

### 語句語法

次の如き助詞「や」の用法に注意する。

オカネヤタカラモノガ、タクサン出マシタ。

次の如き「何ヲドウサセル」(使役)の用法について注意する。

ムリニ大ヲナカセテ、

花ヲ咲カセマセウ。

花ヲサカセテゴラン。

次の如き「マタ」は二度くりかへす意味があることを注意する。

トナリノオヂイサンハ、マタソノウスタカリニ來マシタ。

マタオコソッテ、ウストラコハシテ、

## 二十一 ユメ

### 教材の趣旨

ヨイコドモ上「私ノウチ」と關聯し、ヨミカタ卷一「オハカノサウヂ」を受け、卷二「机とこし」かけ、卷三「川」と一聯の脈絡があり、現在の兒童の生活を過去に結びつけ、歴史的感情に培ふ教材である。

家庭に於いて兒童の常に接するものは父母であり、兄弟である。祖

父母はあるものもあり、ないものもある。曾祖父母に至つては、兒童の知らないのが普通で、その溫顔に接し得るものは極めて稀である。随つて兒童の血族關係に就いての知識經驗は頗る乏しいといはなければならぬ。本教材は兒童の夢によつて曾祖父を現し、曾祖父(母)祖父(母)自分とつながつてゐる家系を考へさせ、家及び家庭に對する感情に培ふのを要點とする。

# 文章

兒童の生活を敍した文章であるが、それを過去に結んで行くところに新しい着想がある。

先づこの子どもは床の中にはいつてから考へた。

私ニハ、オトウサンモアリマス。オヂイサンモアリマス。ケレドモ、

オヂイサンノオトウサンハ、オイデニナリマセン。

これは現實についての反省である。

今ハ、オイデニナラナイガ、前ニハ、オイデニナツタニチガヒアリマセ

ン。

おとうさん、おぢいさんからの類推で、ここに祖先を思ふ方向をたどり、祖父の父が「ドンナオカタデアッタデセウ」と曾祖父に對する追慕の心を呼起してゐる。

後半は夢の場面である。

ユメニ、ヒロイノハラヲ見マシタ。

花ガ一メンニ咲イテ、テフテフガトンデキマシタ。

青い鳥にでも見るやうな樂園である。廣々とした野原、そこには美しい花が咲き亂れ、蝶々が舞ひ、小鳥も囀つてゐよう。「ソコへ、一人ノオヂイサンガ出テ來マシタ」その「一人」は、見たことのない人の意味が含まれてゐる。見たことのない「オヂイサン」であるが、よく見るとうちの「オヂイサン」ニヨクニタカタである。この「ヨクニタカタ」といふところが伏線で、子どもはそれを現在の祖父と思つて「オヂイサン」と呼んだ。すると夢の中の「オヂイサン」は、

「ワタシハ、オマヘノオヂイサンノオトウサンダヨ。」  
と答へる。——おぢいさんのおとうさん、即ち曾祖父が、夢に曾孫に呼びかけてににことやさしい顔をする。前節の「ドンナオカタ」に照應して曾祖父の面影がここに現れたのである。

# 取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導して讀ませ讀みが進むに隨ひ次第に現實の部分と夢の部分とを明らかに意識させるやうにする。

文字語句を指導し讀むこと 話すことと書くことと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章を中心とし次のやうな問によつて語合をさせる。

「この子どもはゆうべ寢床の中でどんなことを考へましたか。」

「誰のことを思ひましたか。」

「どんな夢をみましたか。」

「そこはどんなところでしたか。」

「どんな人が來ましたか。」

「何といひましたか。」

「おぢいさんはどんな顔をしてゐましたか。」

「皆さんにも、そんなおぢいさんがあつたと思ひませんか。」

文字の指導 新字讀替の文字を中心として指導する。

コトバノオケイコ六七五頁(三)によりカナヅカヒに注意する。

ヒラガナの指導 コトバノオケイコ六十三頁(一)によつて讀みを練習させる。この文は本文の後半夢の場面をヒラガナで書いたものであるから本文と連絡して取扱ふがよい。

コトバノオケイコ六十四頁(二)によつて書くことを指導し、なほ適宜書取をさせる。新字「べ」

「ど」を指導し、また既習文字「ゆ」「ね」「ら」「お」「な」「ひ」等にも注意して書かせる。

## 注意すべきことば 文字語句語法等

### 矯正すべき訛音方言

ユウベ——「ユンベ」「ヨンベ」と訛らないやうに注意する。

考ヘマシタ——「カンガイマシタ」といはないやうに注意する。

オマヘ——「オマイ」「オメー」などといはないやうに注意する。

### 文字

漢字

新字——考ヘ今

讀替——一人

ヒラガナ——べど

### 語句語法

「イツノマニカ」「メン」この副詞の意味をはつきりさせなほ用法についても文例によつて指導する。

「私ハ思ハズ」のいひまはしについても文例によつて理會させる。

### 備考

#### 連絡

ヨイコドモ上「私ノウチ」ヨミカタニ「ジャシン」と連絡がある。

## 二十三 机とこしかけ

### 教材の趣旨

前課と關聯して、兒童の生活を過去に關係づけるとともに將來へも結んで事象を歴史的發展的に考へるやうに導き、生活感情に培ふ教材

である。

現在の兒童が用ひてゐる机と腰掛は、その實二年生も三年生も四年五年六年の兒童も用ひて來たのであり、場合によつては今の兒童が生まれる前から存在したものである。かういふ見方考へ方は、前課の父から祖父へ、祖父から曾祖父へと溯つて家を考へると同一の態度であるが、本教材では更に來年は又新しい一年を迎へるといふ將來を暗示して、兒童生活を過去及び將來へ結び、机腰掛を自分の友だちとも、恩人とも考へさせるやうにしてある。一方この時期の兒童の主體的な態度を生かして、机や腰掛をただ無心の備品として眺めず、默々として彼等をいたはりつつその學習を助けてくれたことを感じさせ、物を愛護し感謝する精神に培ふことをめざしてゐる。

### 文章

先生のお話によつて、机と腰掛が長い間働いてゐること、またこれから長く働くことを知り、このはたらきに對する感謝から自然と机と腰

掛を大切にすべきことを暗示する文章で、説明の形式をとらないでこれを先生のお話として出したところにこの期の児童の心情に即した表現がある。

本文は前後三段から成つてゐる。前段の要所は、

「みなさんのつかつてゐる机もこしかけも、長い間はたらいてゐます。」に盡きてゐる。二年生も、三年生も、四年の人も、五年の人も、六年の人も、その前の人も、これを使つて勉強したといふのも、みなさんの生まれる前から、この机もこしかけもあつたといふのも、長い期間の連續を具體化したものである。しかもその表現には次の如く三種の句法の變化を見せてゐる。

- (一) 二年生もこれで、べんきやうをしました。
- (一) 三年生もこれで、べんきやうをしました。
- (二) 四年の人も、五年の人も、六年の人も、その前の人もこれをつかひました。

(三) みなさんの生まれる前から、この机もこしかけもあつたのです。

次に來る「ここまでお話をきいたとき、ふと私は、ゆうべのゆめのことを思ひ出しました」は、先生の話を聞いた「私」の聯想であつて、その内容はゆうべの夢、即ち前課の「おぢいさんのおとうさん」のことを意味する。

この一文によつて本課と前課は不可分な關係を持つ。

後段の要所は、「この机やこしかけを、かはいがつてやりませうねであつて、いはばこの文の結びである。ただ大事にせよといはないで、かはいがつてやりませうね」といつたところに、児童の幼い心情に訴へてその實踐を促す意圖が見られる。

#### 取扱の要點

讀むこと 發音を正し、文の意味をよく考へて讀ませるやうにする。先生のことばは頗る暗示に富んでゐるからよく讀ませることによつてその力を感得させ、自ら反省するやうに誘導して行く。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

コトバノオケイコ六十六頁(一)を読ませ教材の理會に資する。

話すこと 兒童の机や腰掛について話をさせ、自ら文章と關係づけて行く。文章については次のやうな問によつて話をさせる。

「まづ先生は机と腰掛はどうしてゐると、お話になりましたか。」

「この机と腰掛で勉強した人にはどんな人がありますか。」

「この机と腰掛はいつ頃からあつたのですか。」

「そんなに長い間働いて來たのですが今度みんなが二年生になつたら誰が使ふのですか。」

「先生は机や腰掛をどうしてやりませうとおつしやいましたか。」

文字の指導 新字讀替の文字を中心に指導する。「間」は特に字形筆順に注意を要する。

書くこと コトバノオケイコ六十六頁(二)によつて文字を正確に書かせる。「な」「ら」「る」「み」「や」

「ひ」等のヒラガナ、長「生」來等の漢字につき字形筆順に注意して書くことを練習する。

ことばの仕事 コトバノオケイコ六十七頁(三)によつて敬語の使ひ方を練習させる。例へば「おちいさん」「先生等の主語をいろいろにおかさん、おばあさん、私、弟等代へていはせる。

### 注意すべきことば 文字 語句語法等

#### 矯正すべき訛音方言

先生——「シェンシェー」の訛音を矯正する。

べんきやう——「ベンキョ」と短呼しないやうに注意する。

#### 文字

新字——机<sup>ツクエ</sup> 先生 長い間<sup>アイダ</sup> 二年生<sup>ニネンシ</sup> 新しい

讀替——先生<sup>セー</sup>

#### 語句語法

次の如き文例によつて代名詞「これ」の用法に注意し「それ(ネズミ、ノヨメイリ)」と比較して指導する。

二年生も、これでべんきやうをしました。

三年生も、これでべんきやうをしました。

その前の人も、これをつかひました。

「ふと」の副詞は次のやうな用例で理會させる。

ふと私は、ゆうべのゆめのことを思ひ出しました。

ふと目をさしました。

ふと後を見ました。

#### 備考

#### 連絡

ヨミカタニ「ユメ」の發展として取扱ふ。

エノホンニ「ツクエコシカケ」と連絡して取扱に考慮する。

（以上 二月）

## 二十四 ウグヒス

### 教材の趣旨

早春のある朝、ねえさんに起されながら起き澁つてゐた勇が、鶯の聲を聞き、やがて二年生になるのだと元氣づけられて、すぐ飛び起きたといふ自然と生活とを一體とし、春を迎へる喜びを敍した教材である。

春になる、二年生になる、——これはこの頃の一年生に取つては大きな希望であり、喜びである。この希望に生き、潑刺として伸び行く童心を育てるのが低學年の兒童を指導する上の要件である。

本教材は、ややもすれば朝起獎勵といった教訓のみを抽出して強要されがちとなるが、本教材は敢へてさうした徳目を主題とするものでなく、春と進級とに對する兒童の歡喜感激が全文を支配する感情である。隨つて表面から教訓を強制することなく、教材の表現に即して指

導し、児童をして自然にその意義に感得させることが望ましい。

# 文章

文は突如として姉が勇を起す聲から書起してあるが、この場合には自然な表現である。「ハイ」と返事をしたが、また寝てしまった勇に對し、姉は「勇サン、勇サン」と呼びたて、早くオキナイト、學校がオクレマ、スヨ」と注意する聲は「前ヨリモ大キナコエ」になつてゐることに注意を要する。直ぐ起きようと思つた勇であるが、「ネムクテネムクテ」たまらない。「タマリマセン」と現在法を用ひてその刹那の感じを強めてゐる。姉は起さうとする。勇はねむくてたまらない。この時、「ホウホケキヨ」と鳴く鶯の聲がこの場面を轉換させる契機となつた。「アラ、ウグヒスヨ」といふ姉の聲は急に生き生きとする。勇はねむたさも忘れて思はず耳をそばだてたことであらう。姉はすかさず、

「モウ、春デス。勇サン、モチキ二年生デハアリマセンカ。サア、早くオオキナサイヨ。」

といつた。鶯の聲に心の動いた勇である。「春デス」といはれ、モチキ二年生デハアリマセンカ」といはれてはもうじつとしてゐられない。心氣一轉、ねむたさも忘れて飛起きたのである。かうした心情は幼童に一般であつて、指導するものの心すべきことである。

文末の庭でまた鶯が「ホウホケキヨ」と鳴いたところは、この文の餘韻である。

## 取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導する。對話のはいつた文であるから、特にその氣持を生かして讀ませるやうにすることが大切である。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章挿畫を中心とし、次のやうな問によつて話をさせる。

「ねえさんは何といつて勇さんを起しましたか。」

「勇さんはどうしましたか。」

「すると、ねえさんは何といひましたか。」

「ねえさんはどんな聲でいひましたか。」

「勇さんはどう思ひましたか。」

「勇さんは起きようと思ひながらどうしましたか。」

「その時庭の方で何が鳴きましたか。」

「何といつて鳴きましたか。」

「ねえさんは何といひましたか。」

「勇さんはどう思つたでせう。」

「ねえさんは外を見ながらまた何といひましたか。」

「それを聞いて、勇さんはどんなに思つたでせう。」

「さうしてどうしましたか。」

「庭からまた何の聲が聞えましたか。」

「いつしよに言つてごらんさい。」

文字の指導 新字讀替を中心として文字を指導する。庭は字形筆順につき特に注意を要する。

ヒラガナの指導 コトバノオケイコ六十八頁(一)によつて讀みを指導する。この頃になれば兒童はヒラガナの文の讀みには大分慣れてゐると思はれるが、讀み渡るものにはヨミカタの文章の對話と對照させて指導する。なほ適宜兒童を指名して劇的に讀ませるがよい。

コトバノオケイコ六十九頁(二)によつて文字を正確に書かせる。既習文字であるが「す」「き」「れ」「ん」「せ」等は字形筆順に注意を要する。なほ適宜書取をさせる。

### 注意すべきことば 文字 語句語法等

#### 矯正すべき訛音方言

ネムクテ——「ネムクッテ」といふところもあるが「ネムクテ」を標準とする。

ウグヒス——「オゴイス」「オモイス」等訛音が多いから矯正する。

#### 文字

新字——七時<sup>シ</sup> 庭<sup>ニワ</sup> 春<sup>ハル</sup>

讀替——ソノ時

#### 語句語法

「勇サン、勇サン」「ネムクテネムクテタマリマセン」の如き反復の語句によつて意味が強められてゐることに注意する。

「アラ」の感動詞は大體女子のことばであることに注意する。

「二年生デハアリマセンカ」は「二年生デアリマス」と比較して讀ませどちらが強いひまはしであるかを考へさせる。

#### 備考

連絡

ヨイコドモ上「ヒトニタヨルナ」カズノホンニ「雛祭」(四十六頁、自然の觀察二「春を待つ庭」ウタノホン上「ウグヒス」と連絡して取扱に考慮する。

二十五 つくし

教材の趣旨

前課と關聯し、早春の自然として兒童に一般的な土筆を主題とし、春を待つものの喜びを表現した教材である。  
あらゆるものが暖い春光を受けて蘇り、生氣は將に動かうとしてゐる。その魁として早春を象徴し代表するやうな土筆を、兒童の主體的な態度に即して擬人的に表現してある。  
前課と同様、やがて二年生の春を迎へようとする兒童の希望に満ちた心に通じてゐる。

文章

二聯より成り、各聯五七、七五、七五を基調としてゐるが、その七は時に六となり、また八となつてゐる。

第一聯は、暖い春の日を浴びて土筆が目をさましたことが歌つてゐる。既に春ではあるが、まだ青い物のない枯草ばかりの地上に、春の日を浴びてかはい頭をもたげた土筆である。そのうひうひしい姿を坊やが目をさましたのに見立てたので、そこに實感に即した擬人がある。土筆を坊やとすれば、自然「つくし」だれの子の疑問が出る。その問に對して「すぎなの子」は答になつてゐる。この問答の句法には、いかにも土筆の坊やを愛撫するやうな心が託されてゐる。土筆は子囊穗を有する莖であり、すぎなは榮養莖であつて、もとより親子の關係があるわけではないが、どこまでも兒童の主體的感情に即した表し方である。(よし自然の觀察に於いても、この時期の兒童にはさうした既成科學の知識を授くべきではない。)

「あつたかい」は正しくは「あたたかい」であるが、韻文であるから許容的に用ひ、柔かな感じを出したのである。

第二聯は、目をさました土筆がやがて活動にうつるやうな見方で敍せられてゐる。しかし、何も第一聯以上に更に土筆が成長したものと考へる必要はない。要は「目がさめて、外を覗く」といふに過ぎないのであり、それを第一聯と第二聯に歌ひつけたものである。「外をのぞいたら」に幼きものの外を見る喜びが託されてをり、その喜びにふさはしく外には春の風がそよそよと吹いてゐるのである。

#### 取扱の要點

讀むこと 韻文であるから、發音に注意し韻律を生かして讀むやうに指導する。何回も讀ませて自然に暗誦させる。

文字語句を指導し讀むこと 話すこと書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 土筆取りの體驗について話合をさせる。また文章挿畫を中心とし、コトバノオケイコ七十頁の挿畫と連繫して、次のやうな問によつて話合をさせる。

「ばかばかとあつたかい日とはどんな日でせう。」

「そんな日に土筆がどうしたと書いてありますか。」

「そのかはいい土筆は誰の子だといつてありますか。」

「土筆の坊やはどんなにして外を見てゐますか。」

「土手とはどんなところですか。」

「その土手の南の方の暖いところで土筆の坊やが頭を出して外を見てゐるのですね。外はどうですか。」

「春の風がどんなに吹いてゐますか。」

文字の指導 讀替文字を中心として指導する。

ヒラガナの指導 コトバノオケイコ六十九頁(一)によつて文字を正確に書かせる。新字「ほ」

「ぞ」の字形筆順を指導し又「あ」「め」「れ」「な」等にも注意する。

ことばの仕事 コトバノオケイコ七十頁(二)のことばを用ひて短い文を綴らせる。

#### 注意すべきことば 文字語句語法等

#### 矯正すべき訛音方言

つくし——地方により方言が多い。矯正につとめる。

目——「メ」といはいやうに注意する。

#### 文字

漢字

讀替——土手

ヒラガナ——ぼ そ ぞ

備考

連絡

カズノホンニ「私たちの村」五十五頁、自然の觀察ニ草つゐと連絡して取扱ふ。

## 二十六 汽 車

教材の趣旨

子どもは動くものを好む。動物を始め、汽車、電車、自動車、飛行機等の乗物に心をひかれる。本教材はかうした童心に即した生活の表現で、兄弟の氣質もよく現れてゐる。兄は三年または四年生であり、理知も相當に發達してゐるが、弟は内省的な子どもである。兄は絶えず積極的に働きかけ、汽車だ。正ちゃん、見に行かう、くわもつ列車だ。長い、長

い、いくつあるか、かぞへてみようといふのに對して、弟は常に追従しながら動いてゐるが、しかもよく要點を觀察してゐる。

兄は最後まで數へた。最後に近づくとき一段大きな聲で得意さうに數へてゐる。弟は途中で數へることができなくなつたが、しかも牛をのせた車木を積んだ車、石を積んだ車をじつと見てゐるのである。汽車が遠くへ行くに隨つて一種のあこがれを感じ、さつき見た牛の車のことを考へた。——牛でも汽車に乗つてゐる。ぼくも汽車にのりたいなあ。——これは恐らく汽車を見る子どもに共通な心であらう。

卷二は「山ノ上」のあこがれに始つて、「汽車」のあこがれに終つてゐる文章

「ゴ—」と遠くの方でする汽車の音で筆が起してある。これは「イモヤキ」「ウグヒス」にも用ひられてゐるもので、表現を如實ならしめる手法である。「汽車はぐんぐん大きくなつて、こつちへ來ます」「ぐんぐんの副詞によつて汽車の大きくなつて進んで來るさ、まが、さながら見える

やうに表してある。「こつちへ來ます」の現在法も生きてゐる。「シュツ、シュツ、シュツ、シュツ」といふ機關車の擬聲が強く響いてゐる。「くろいはこの車が、あとからあとからやつて來ます」も目に見えるやうだ。ここにも「やつて來ます」と現在法が用ひられてゐる。

牛のたくさん乗つてゐる車に心をひかれ、「おや」と思つた瞬間に正男は車の數がわからなくなつたが、それがために「牛のあとから大きな木をつんだ車や、石をつんだ車が、いくつもいくつも通つたことを觀察し、それが敘述に生かしてある。しまひ頃になつて、大きな聲を出して數へてゐる兄に目をつけたのも自然である。「四十八」と數へ終つた後の二人は汽車を見送つてゐるのであるが、「だんだん小さくなつて」とほくの方へ行つてしまふ様子が自然によく表され、最初の「汽車はぐんぐん大きくなつて、こつちへ來ます」と照應してゐる。汽車を見送つた後も、正男はなほ心に残つた牛のことを考へて、「ぼくも汽車にのりたいなあ」といつてゐるが、これは子どもの實感であり、あこがれの心である。

### 取扱の要點

讀むこと 對話や擬聲が多く用ひられてゐるから發音を正し、敘述を生かすやうに讀みを指導する。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて、讀みを確實にする。

話すこと まづ汽車についての體驗を話させ、また文章挿畫掛圖を中心とし、次のやうな問によつて話をさせる。

「遠くの方でどんな音がしましたか。」

「正男さんのに、いさんは何といひましたか。」

「二人はどうしましたか。」

「汽車はどんなにして來ましたか。」

「いさんは何といひましたか。」

「機關車はどんな音をたてて來ましたか。」

「その時に、いさんは何といひましたか。」

「黒い箱の車がどんなにしてやつて來ましたか。」

「一、二、三、四と數へて十八まで來た時、どんな車が通りましたか。」

「おやと思つて、正男さんはどうしましたか。」

「牛の箱のあとからどんな車が通りましたか。」

「おしまひ頃になるといさんはどんなにしましたか。」

「箱はみんなで幾つありましたか。」

「汽車が遠くへ行つてしまつた時、正男さんはどう思ひましたか。」

文字の指導 新字讀替を中心として文字を指導する。「汽」「牛」は誤りやすいから特に字形筆順に注意を要する。

コトバノオケイコ七十一頁(二)によつて助詞「へ」のカナヅカヒに注意する。

書くこと コトバノオケイコ七十一頁(一)によつて文字を正確に書かせる。また適宜書取をさせる。「わ」「も」「す」「る」「ば」等の字形筆順に注意する。

なほヒラガナの中でまだ書くことの指導をしないものは「せ」「し」「ち」「つ」「ん」の七字であるが、これらは何れも濁音または半濁音の文字であるから適宜練習させるやうにする。

ことばの仕事 コトバノオケイコ七十二頁(三)によつて二つの文を比較して讀み味ははせ、これを繪に書かせる。

### 注意すべきことは文字 語句 語法等

#### 文字

新字——汽車 走はしつて くくもつ 列車 牛

#### 讀替——車

#### 語句 語法

次の如き副詞の用法について指導する。

汽車はぐんぐん大きくおほくなつて、ここちへ來ます。

汽車はだんだん小さくちひさくなつて、とほくの方へ行つてしまひました。

車がいくつか通りました。

車がいくつもいくつも通りました。

車があとからあとからやつて來ます。

「コ」「シ」「ュ」「ッ」の擬聲について指導する。

(以上 三月)

# 新出讀替文字一覽

〔左傍ニ一ヲ附シタモノハ讀替文字デアル〕

| 課 | 頁  | 行 | 新出讀替文字                                           |
|---|----|---|--------------------------------------------------|
| 一 | 四  | 五 | 村 <sup>ムラ</sup>                                  |
| 二 | 九  | 六 | 間 <sup>マ</sup> シニ                                |
| 三 | 一〇 | 二 | 店 <sup>テン</sup>                                  |
| 四 | 一四 | 八 | 急 <sup>キウ</sup> ゲ                                |
| 五 | 一五 | 二 | 來 <sup>ライ</sup> ナイ                               |
| 六 | 一七 | 一 | 正 <sup>セイ</sup> シイ                               |
| 七 | 一八 | 三 | 日 <sup>ニチ</sup> 本 <sup>ポン</sup> 中 <sup>チュウ</sup> |
| 八 | 一八 | 一 | 西 <sup>セイ</sup>                                  |

|     |    |    |    |   |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
|-----|----|----|----|---|-----------------------|---------------------|---------------------|---------------------|-----------------------|-----------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 五   | 一八 | 二〇 | 四  | 一 | 夕 <small>タ</small> ヤケ | 東 <small>トウ</small> | 秋 <small>アキ</small> | 柿 <small>カキ</small> | 早 <small>ハヤ</small> ク | 長 <small>ナガ</small> イ | 栗 <small>クリ</small> | 前 <small>マエ</small> | 灰 <small>ハイ</small> |
| 六   | 二三 | 二  | 五  | 二 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 七   | 二三 | 六  | 一  | 六 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 二五  | 二八 | 二六 | 二九 | 二 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 八   | 三三 | 三  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 九   | 三三 | 六  | 六  | 二 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 一〇  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 一一  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 一二  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 一三  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 一四  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 一五  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 一六  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 一七  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 一八  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 一九  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 二〇  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 二一  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 二二  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 二三  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 二四  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 二五  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 二六  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 二七  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 二八  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 二九  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 三〇  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 三一  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 三二  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 三三  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 三四  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 三五  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 三六  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 三七  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 三八  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 三九  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 四〇  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 四一  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 四二  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 四三  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 四四  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 四五  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 四六  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 四七  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 四八  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 四九  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 五〇  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 五一  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 五二  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 五三  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 五四  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 五五  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 五六  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 五七  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 五八  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 五九  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 六〇  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 六一  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 六二  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 六三  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 六四  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 六五  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 六六  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 六七  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 六八  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 六九  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 七〇  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 七一  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 七二  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 七三  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 七四  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 七五  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 七六  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 七七  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 七八  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 七九  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 八〇  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 八一  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 八二  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 八三  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 八四  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 八五  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 八六  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 八七  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 八八  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 八九  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 九〇  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 九一  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 九二  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 九三  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 九四  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 九五  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 九六  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 九七  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 九八  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 九九  | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |
| 一〇〇 | 四〇 | 二  | 四  | 一 |                       |                     |                     |                     |                       |                       |                     |                     |                     |

|                       |                                                                |                         |                     |                                         |
|-----------------------|----------------------------------------------------------------|-------------------------|---------------------|-----------------------------------------|
| 一四                    | 一三                                                             | 一二                      | 一一                  | 一〇                                      |
| 五〇                    | 四八                                                             | 四七                      | 四五                  | 四四                                      |
| 四                     | 三                                                              | 一                       | 五                   | 一                                       |
| 妹 <small>イモ</small>   | 池 <small>イケ</small>                                            | 冬 <small>フユ</small>     | 馬 <small>ウマ</small> | 呼 <small>ヨ</small> ビ                    |
|                       |                                                                |                         |                     | 私 <small>ワタクシ</small>                   |
|                       |                                                                |                         |                     | 學 <small>ガク</small> 校 <small>カウ</small> |
|                       |                                                                |                         |                     | 客 <small>キヤク</small>                    |
|                       |                                                                |                         |                     | 笑 <small>ワラ</small> ハナイデ                |
|                       |                                                                |                         |                     | 隠 <small>カクレ</small> ニ                  |
| 一五                    |                                                                |                         |                     | 一四                                      |
| 五六                    |                                                                |                         |                     | 五一                                      |
| 三                     | 一                                                              | 六                       | 一                   | 二                                       |
| 持 <small>モ</small> つて | お <small>ニギハク</small> 証 <small>シヤウ</small> 明 <small>メイ</small> | 光 <small>ヒカリ</small> ッテ | 口 <small>クチ</small> | 炭 <small>スエ</small>                     |
|                       |                                                                |                         |                     | 二 <small>フタ</small> 人 <small>リ</small>  |
|                       |                                                                |                         |                     | 來 <small>ク</small> ル                    |
|                       |                                                                |                         |                     | 竹 <small>タケ</small>                     |
|                       |                                                                |                         |                     | 雪 <small>ユキ</small>                     |
|                       |                                                                |                         |                     | 氷 <small>コホリ</small>                    |

|                       |                           |                       |                       |                        |                        |                       |                      |                     |                       |    |
|-----------------------|---------------------------|-----------------------|-----------------------|------------------------|------------------------|-----------------------|----------------------|---------------------|-----------------------|----|
| 一五                    | 五七                        | 一六                    | 五八                    | 五九                     | 六〇                     | 一七                    | 六五                   | 六六                  | 六九                    | 七一 |
| 四                     | 一                         | 四                     | 三                     | 五                      | 六                      | 六                     | 六                    | 四                   | 五                     | 六  |
| お舟 <small>フネ</small>  | 兵 <small>ヘイ</small> タイゴツコ | 太郎 <small>タラウ</small> | 次郎 <small>ジロウ</small> | 工兵 <small>コウヘイ</small> | 生 <small>ウマ</small> マレ | 思 <small>オモ</small> ヒ | 雲 <small>クモ</small>  | 風 <small>カゼ</small> | 吹 <small>フ</small> キ  |    |
| 一八                    | 七七                        | 二〇                    | 八四                    | 八五                     | 二二                     | 八七                    | 八九                   | 九〇                  |                       |    |
| 七                     | 六                         | 四                     | 五                     | 六                      | 五                      | 二                     | 七                    | 一                   | 六                     |    |
| 送 <small>オウ</small> リ | 立 <small>タチ</small> チ     | 朝 <small>アサ</small> 日 | 日 <small>ヒ</small> の九 | 君 <small>キミ</small> が代 | 島 <small>ハタケ</small>   | 土 <small>ツチ</small>   | 話 <small>ハナシ</small> | 米 <small>コメ</small> | 咲 <small>サキ</small> キ |    |



|    |    |    |    |    |    |    |   |    |
|----|----|----|----|----|----|----|---|----|
| 一六 |    |    | 一五 |    |    | 一四 |   |    |
| 四三 | 四二 | 三七 |    | 三六 | 三四 | 三三 |   |    |
| ゆ  | よ  | ぼ  | も  | じ  | ら  | か  | を | だる |
|    |    |    |    |    |    |    |   |    |
|    |    |    |    | 一七 | 一六 |    |   |    |
| 四九 | 四八 |    |    | 四六 | 四四 | 四三 |   |    |
| む  | ば  | れ  | み  | ず  | ね  | め  | せ | ふわ |
|    |    |    |    |    |    |    |   |    |

|    |    |   |    |    |   |    |    |    |
|----|----|---|----|----|---|----|----|----|
|    |    |   | 一二 |    |   | 一一 |    |    |
|    |    |   | 二七 | 二六 |   | 二四 |    |    |
| き  | こ  | く | は  | り  | す | お  | で  | しま |
|    |    |   |    |    |   |    |    |    |
| 一四 |    |   |    |    |   | 一三 | 一二 |    |
| 三三 | 三一 |   | 三〇 |    |   | 二九 | 二七 |    |
| な  | に  | い | け  | ゐ  | が | び  | と  | ろち |
|    |    |   |    |    |   |    |    |    |

|    |   |    |    |    |   |   |    |    |    |
|----|---|----|----|----|---|---|----|----|----|
| 二五 |   | 二三 | 二二 | 二〇 |   |   | 一九 |    | 一八 |
| 六九 |   | 六四 | 六〇 | 五八 |   |   | 五五 | 五三 | 五一 |
| ぽ  | ど | べ  | ほ  | ば  | ぬ | 糸 | げ  | ぐ  | ち  |
|    |   |    |    |    |   |   |    | 二五 |    |
|    |   |    |    |    |   |   |    | 七〇 |    |
|    |   |    |    |    |   |   | ぞ  | そ  |    |

一五六

一五六

運筆順序

（特に藝能科の誤り易いもの又は二様以上あるものを掲げた。）

青方店正長灰火里病

[illegible]

學馬妹冰雪炭光兵生

イニタフミ字  
一三ノミ  
クノ一ニ木  
一ノミミコ一  
山一ノミ人  
一ソ一ノシ  
イテハ  
ル一ニ

|                  |                  |                       |                   |                  |
|------------------|------------------|-----------------------|-------------------|------------------|
| 米                | 土                | 畠                     | 雲                 | 思                |
| 一<br>一<br>一      | 一<br>一<br>一      | 白<br>一<br>一           | 一<br>一<br>一<br>ニム | 一<br>ニ<br>心      |
| 走                | 庭                | 間                     | 考                 | 通                |
| 十<br>一<br>一<br>人 | 一<br>ニ<br>一<br>一 | 一<br>ニ<br>一<br>一<br>日 | 土<br>ノ<br>一<br>一  | 一<br>ニ<br>一<br>一 |

鉛筆による書き方指導上の注意

姿勢

- 椅子にやや浅く腰をかけ、兩脚は少し開く。
- 下腹を前に出し、尻を引いて脊柱を正しくする。
- 胸を机におしつけぬやうにする。
- 左手を紙上にのせ、左腕を前に張らぬやうにする。

執筆並びに運筆

- 右腕は軽く机上にのせ、脇の下を開いて腕を伸ばす。
- 低學年では掌の右側を紙につけて書くが、高學年に及んで次第に軽くつけ、遂には手首のみをつけて運筆するやうに指導する。
- 四本の指は離れぬやうに密着させる。
- 鉛筆と紙面との角度は右後へ六十度乃至七十度とする。
- 鉛筆は中指の爪のつけ根のあたりから、食指の根本にかける。
- 鉛筆は軽く持つて、あまり下を持たぬやうにする。
- 運筆は毛筆の如く、強弱緩急をつけず、低學年に於いては字形を主とし、上達するに随つて速度を加へ緩急をつける。

その他

- 鉛筆は直径の二倍乃至三倍の斜面に削り、芯はなるべく尖らせないで使ふやうに簇ける。
- 鉛筆の芯をなめるくせをつけないやうにする。

ヨミカタニの發音 (ガキゲゴは  
鼻濁音を示す。)

## 一 ヤマノ ウエ

ムコーノ ヤマニ  
ノボッタラ、  
ヤマノ ムコーワ  
ムラ ダッタ、  
タンボノ ツズク  
ムラ ダッタ。  
ツズク タンボノ  
ソノ サキワ、  
ヒロイ、ヒロイ

ウミ ダッタ、  
アオイ、アオイ  
ウミ ダッタ。

チーサイ シラホガ

フタツ ミツ、

アオイ ウミニ

ウイテ イタ、

トクノ ホーニ

ウイテ イタ。

## 二 アシタワ ウンドーカイ

ヒルスギカラ、ソラガ クモッテ キマシタ、  
アシタワ ウンドーカイ デス。イサムサンワ、  
テンキガ シンパイ。

デタマリマセン。ソトエデテ、ソラバカリミテイマス。  
 イサムサンワ、カミデテルテルポーズオツクリマシタ。ソレオ  
 ニワノキノエダニツルシテ、  
 テルテルポーズ、

テルポーズ、

アシタテンキニ

シテオクレ。

トウタイマシタ。

ケレドモ、ソラワ、ダندانクラクナツテキマシタ。トートー  
 アメガフリダシマシタ。テルテルポーズワ、ビシヨスレニナツテ、  
 ナイテイマス。

スコシタツテカラ、イサムサンワ、オカーサンニイッツカッテ、  
 ハガキオダシニイキマシタ。

イサムサンワ、「アメガラッテツマラナイナー。」トイーナガラ、

カサオサシテデカケマシタ。  
 スコシイクト、トケーヤノミセカラ、ラジオガキコエテキマ  
 シタ。

「コンヤワアメデスガ、アスワヨイテンキニナリマス。」  
 イサムサンワ、ウレシクテタマリマセンデシタ。オーイソギデ  
 ハガキオダシテ、ウチエカエリマシタ。

「オカーサン、アシタワオテンキデス。ラジオガ、ソーイーマ  
 シタヨ。」

トイーマスト、オカーサンワ、

「マ、ヨカッタネ。デワ、オイシーオベントーオコシラエテ  
 アゲマスヨ。」

トオッシャイマシタ。

### 三 ウサギトカメ

ウサギ「カメサン、コンニチワ。」

カメ「ウサギサン、コンニチワ。」

ウサギ「ナニカ、オモシロイコトワナイカナ。」

カメ「ソーダネ。」

ウサギ「カケツコオシヨーカー。」

カメ「ソレワオモシロイ。」

ウサギ「デモ、ボクノカチニキマツテイルナ。」

カメ「ソナコトワナイヨ。」

ウサギ「デワ、ヤロー。ケツシヨートンワ、アノヤマノウエダヨ。」

カメ「ヤマノウエ。イートモ。」

ウサギ「ヨーイ、ドン。」

ウサギ「オソイカメサンダナ。アシナニオクレテシマッタ。コノヘンデ、ヒルネオシヨ。グーグーグー。」

カメ「オヤオヤ、ウサギサン、ヒルネオシテイルゾ。イマノウチ、

ニオイコソー。イソゲ、イソゲ。」

ウサギ「アー、イーキモチダッタ。マダ、カメサンワココマデコ、

ナイダロー。ドレ、デカケヨーカーナ。オヤ、ヤマノウエニ

ダレカイルゾ。」

カメ「バンザイ。」

ウサギ「ヤー、カメサンダ。シマッタ、シマッタ。」

#### 四 ラジオノコトバ

ニッポンノラジオワ、

ニッポンノコトバオハナシマス。

タダシーコトバガ、

キレーナコトバガ、

ニッポンジューニ キコエマス。

マンシユーニモ トドキマス。

シナニモ トドキマス。

セカイジューニ ヒビキマス。

五 ニシワ ユーヤケ

イサムサンワ、マンシユーノ オジサンカラ、ホンオ オクツテ、イ  
タダキマシタ。マンシユーノ コドモたちノ ヨム ホン デシタ。  
イチバン ハジメニ、マンシユーノ ソラノ ウツクシー コトガ、  
カイテ アリマシタ。ソレカラ、ヒロイ、ヒロイ ノハラニ、コーリ  
ヤント イツテ、ニッポンノ キビニ ニタ モノガ デキル コト  
ガ、カイテ アリマシタ。  
ヨンデ イク ウチニ、ツギノヨトナ ウタガ アリマシタ。

ニシワ ユーヤケ アカイ クモ、

ヒガシワ マルイ オツキサマ。

コーリヤン カツテ ヒロイナ！

ドツチオ ミテモ ヒロイナ！

ヒロビロト シタ マンシュートエ、イサムサンワ イツテ ミタク

ナリマシタ。

イサムサンワ ソトエ デテ、ムネオ ハリナガラ、イキオ イツパ

イ スイコミマシタ。ソーシテ、オーキナ コエデ ウタイマシタ。

ニシワ ユーヤケ アカイ クモ、

ヒガシワ マルイ オツキサマ。

コーリヤン カツテ ヒロイナ！

ドツチオ ミテモ ヒロイナ！

六 カマキリジーサン

カマキリジーサン  
 イネカリニ、  
 カマオ カツイデ  
 アゼミチオ、  
 トーイ タンボエ  
 イソギマス。  
 キレーニ ハレタ  
 アキノ ヒニ、  
 トーイ タンボエ  
 イソギマス。

七 サルト カニ

サルガ カキノ タネオ ヒロイマシタ。

カニガ ニギリメシオ ヒロイマシタ。  
 サルワ、カニ エ イツテ、カキノ タネト トリカエツコオ シマ  
 シタ。サルワ、ニギリメシオ オイシソーニ タベマシタ。  
 カニワ、カキノ タネオ ニワニ マキマシタ。

「ハヤク メ オ ダセ、カキノ タネ。」

「ハヤク メ オ ダセ、カキノ タネ。」

メ ガ デマシタ。

「ハヤク キニ ナレ、カキノ タネ。」

「ハヤク キニ ナレ、カキノ タネ。」

キニ ナリマシタ。

「ハヤク ミ ガ ナレ、カキノ タネ。」

「ハヤク ミ ガ ナレ、カキノ タネ。」

オーキナ カキガ、タクサン ナリマシタ。

サルガ アソビニ キマシタ。

「ボクガ トッテ アゲヨ。」

ト イッテ、キニ ノボリマシタ。ナガイ テオ ノバシテ、カキオ  
イクツモ イクツモ トリマシタ。

サルワ ジブンバカリ タベマシタ。シマイニ、アオイ カキオ カ  
ニ ニ ナゲツケテ、イッテ シマイマシタ。

カニワ オーケガオ シマシタ。

ソコエ、ハチガ キマシタ。

ウスガ キマシタ。

クリガ キマシタ。

ミンナデ、サルオ コラス コトニ シマシタ。

サルオ ヨビニ ヤリマシタ。

サルガ、カニノ ウチエ キテ、ヒバチノ マエニ スワリマシタ。

ハイノ ナカニ、カクレテ イタ クリガ、サルニ ポント トビツ、

キマシタ。サルワ、アツイ、アツイ。ト イッテ、ミズオ カケニ

イキマシタ。

ミズガメノ ナカニ カクレテ イタ ハチガ、サルノ カオオ チ

クリト サシマシタ。サルワ、「イタイ、イタイ。」ト ナイテ、トグチ

ノ ホーエ ニゲマシタ。ウスガ、ウエカラ ドシント オチテ キ

マシタ。

ソコエ、カニガ キマシタ。クリモ キマシタ。ハチモ キマシタ。

サルワ、ジブンガ ワルカッタト アヤマリマシタ。

八 オチバ

キヌコサント ハナコサング、オチバオ ヒロイニ、ハヤシノ ナカ  
エ イキマシタ。

キーロナ ハ ヤ、マツカナ ハ ガ、タクサン、オチテ イマス。

アルクト、カサカサ、オトガ シマス。

キヌコサング、キーロナ ハ オ イチマイ ヒロツテ、ヒニ スカ

シナガラ、

「ハ、ノ スジガ、キレーニ ミエマスヨ。」

ト イーマシタ。

ハナコサンガ、モミジノ ハ オ ヒロツテ、

「コレオ オシバニ シマショ。」

ト イーマシタ。

コトリガ、チチ チチト ナイテ イマス。

九 イモヤキ

「キョーワ、ハタケノ カタズケオ ショ。」

ト、オトーサンガ、オッシャイマシタノデ、オカーサンモ、ボクモ、

オトートモ、ハタケニ デマシタ。

ミンナデ、アチラ コチラニ オチテ イル キノ エダヤ、カレク、

サナドオ、ヒトトコロニ アツメマシタ。ソレニ、オトーサンガ ヒ

オ オツケニ ナリマシタ。ケレドモ、スグ キエマシタ。

オカーサンガ、カンナクズオ モツテ オイデニ ナリマシタ。コン、

ドワ ヨク モエマシタ。ミンナデ、カレエダヤ オチバオ カブセ、

ルト、パチパチト モエアガリマシタ。

オトートワ、

「エンマク ダ、エンマク ダ。」

ト イツテ、ヨロコビマシタ。

オカーサンガ、オーキナ、オイモオ フタツ モツテ、キテ、ハイノ

ナカエ、オイレニ ナリマシタ。

「ハヤク ヤケナイカナ。」

ト、オトートガ イーマシタ。ボクワ、

「ソンナニ ハヤクワ ヤケナイヨ。」

ト イツテ、オトートト、オトナリノ ウサギノ コオ ミニ イキ

マシタ。ウサギノ コワ、ゴヒキ イテ、ヒトカタマリニ ナツテ

イマシタ。

オイモノ コトオ オモイダシテ、マタ ハタケエ イキマシタ。オ。

イモノ ニオイガ、オイシソーニ シテ イマシタ。

オトーサンガ、

「ドレ、ドレ。」

ト、ハイノ ナカオ サガシテ、

「ヤケタ、ヤケタ。」

ト オツシャイマシタ。

ワタクシタチワ オイシク タベマシタ。

十 コモリウタ

ネンネン コロリヨ、

オコロリヨ。

ポーヤワ ヨイコダ、

ネンネシナ。

ポーヤノ オモリワ、

ドコエ イツタ。

アノ ヤマ コエテ、

サトエ イツタ。

サトノ ミヤゲニ、

ナニ モラツタ。

デンデンダイコニ、

シヨーノ フェ。

十一 オイシヤサマ

ハナコサシワ、ニンギョーガ ビョーキニ ナツタノデ、オイシヤサ、

マオ ヨビマシタ。

オイシャサマワ マサオサン デス。オトナノ ボーシオ カブツテ、  
オーキナ カバン、オ モツテ、ハイッテ キマシタ。

「ゴビョーニンワ ドチラ デスカ。」

「アチラニ ネテ オリマス。」

ハナコサンワ、マサオサンオ オクエ トーシマシタ。

マサオサンワ、ニンギョーノ ソ、バニ スワリマシタ。

マサオサンワ、ニンギョーノ テオ トリマシタ。ヒタイニ、サワツ

テ、ミマシタ。オナカオ オサエテ ミマシタ。

マサオサンガ、アンマリ ジョーズニ、オイシャサマノ マネオ ス、

ルノデ、ハナコサンワ、キューニ オガシク ナリマシタ。デモ、ワ

ラワナイデ、ジツト ガマシシテ イマシタ。

マサオサンワ、テーネーニ ミテカラ、

「タイシテ ワルクヌ ナイヨー デス。タベスギ デスネ。」

ト、マジメナ カオオ シテ、イーマシタ。  
ハナコサンワ、トートー、ワライダシマシタ。マサオサンモ ワライ  
ダシマシタ。

## 十二 デンシャゴッコ

ウンテンシユワ キミ ダ。

シャショールワ ボク ダ。

アトノ ヨニンガ、

デンシヤノ オキヤク。

「オノリワ オハヤク、

ウゴキマス、チン チン。」

ウンテンシユワ ジョーズ。

デンシヤワ ハヤイ。

ツギワ ボクラノ  
ガツコーマエダ。

「オオリワ、オハヤク、  
ウゴキマス、チン チン。」

十三 ケンチャン

オカーサンガ、キモノオヌツテ イラッシャイマシタ。ケンチャン  
ガソバエ イツテ、ハリバコニ サワツタリ、キレオ ヒツパツタ  
リシマシタ。

オカーサンガ

「キヌコサン、チョット ケンチャンオ ツレテ、ワンワンオ ミニ  
イツテ チョーダイ。」

ト オッシャイマシタ。

ワタクシワ、ケンチャンオ ツレテ、ソトエ デマシタ。

ワタクシワ、オトナリノ マエエ イツテ、  
「シロ、シロ。」

ト ヨビマシタガ、シロワ イマセン デシタ。

ツトムサンノ ウチノ マエニ、ンマガ イマシタ。

ケンチャンガ、

「オンマ、オンマ。」

ト イーマシタ。

ンマワ、オケノ ナカエ カオオ イレテ、カイバオ タベテ イマ  
シタ。

タベナガラ、トキドキ シツポオ フツテ イマシタ。  
ケンチャンワ、ニコニコシテ ミテ イマシタ。

十四 フユ

一

ケサ、ハジメテ イケノ ミズガ コーリマシタ。  
イモートガ、

「キンギョヤ コイワ、ドーシテ イル、デシヨ―ネ。」

ト シンパイソーニ イーマシタ。ワタクシガ、

「ドコカニ カクレテ イルノ、ダロー。」

ト イーマスト、イモートワ、

「コーリガ バツテ、サカナタチワ サムイ デシヨ―ネ。」  
ト イーマシタ。

## 二

ユキヤ コンゴ、

アラレヤ コンゴ、

タケノ ハ ニ ツモレ、

マツノ キニ ツモレ、

ドンドン ツモレ。

イモートワ ウタイナガラ、マエカケオ ヒロゲテ、フツテ クル

ユキオ ウケテ イマス。

ユキワ、アトカラ アトカラ フツテ キマス。

ナカヨク ナランデ、フツテ クルノモ アリマス。オツガケツコオ

シナガラ、フツテ クルノモ アリマス。トンボガエリオ シナガラ、

フツテ クルノモ アリマス。

## 三

ニーサント フタリデ、ユキダルマオ ツクリマシタ。

ハジメニ、ユキノ タマオ コシラエテ、ソレオ フタリデ コロガ

シマシタ。スルト、ダンダン、オーキク ナツテ、コロガス コトガ

デキナク ナリマシタ。コンドワ、スゴシ チーサイノオ コシラエ

テ、オーキーノニ カサネマシタ。ソレカラ、スミデ メト クチオ

ツケマシタ。

ヨルニ ナツテ、ワタクシワ ニーサンニ、

「ユキダルマオ ミテ キマショー。」

ト イッテ、フタリデ ソトエ デマシタ。

ツキガ ヒカッテ イマシタ。

ユキダルマワ、ドツカリ スワッテ イマシタ。

十五 オショーガツ

オショーガツ コイ、ヤマカラ コイ。

ヤマノ ウラジロ モッテ コイ。

オショーガツ コイ、サトカラ コイ。

オモチ ツキツキ トンデ コイ。

オショーガツ コイ、ウミカラ コイ。

タカラノ オフネニ ノッテ コイ。

十六 ヘータイゴツコ

イサムサンワ、オモチヤノ テッポーオ モッテ、

「ボクワ ホーヘー ダヨ。」

ト イーマシタ。

マサオサンワ、タケンマニ ノッテ、

「ボクワ キヘー ダヨ。」

ト イーマシタ。

タローサンワ、タケノ ツツオ モッテ、

「ボクワ ホーヘー ダヨ。」

ト イーマシタ。

タローサンノ オトートノ ジローサンワ、チーサイ シャベルオ

モッテ、

「ボクワ コーヘー ダヨ。」

ト イーマシタ。

イサムサンノ オートトノ マサジサンワ、サンリンシャニ ノツテ、  
「ボクワ センシャヘー ダヨ。」

ト イーマシタ。

ユリコサンノ オートトノ アキオサンワ、オリガミノ グライダ！  
オ モツテ、

「ボクワ コーキーヘー ダヨ。」

ト イーマシタ。

ハナコサンノ オートトノ イチローサンワ、オモチャノ ジドーシャ  
オ モツテ、

「ボクワ シチキョーヘー ダヨ。」

ト イーマシタ。

ハナコザント、ユリコサンワ、  
「ワタクシダチワ カンゴフニ ナリマシヨ。」

ト イーマシタ。

カタカタ カタカタ  
パンポン パンポン、

ヘータイゴツコ。

カタカタ カタカタ  
パンポン パンポン、  
ボクラワ ツヨイ。

カタカタ カタカタ、  
パンポン パンポン、  
ススメヨ ススメ。

## 十七 ネズミノ ヨメイリ

ネズミノ アカチャンガ ンマレマシタ。ダンドン オーキク ナツ  
 テ、ヨイ ムスメニ ナリマシタ。  
 オトーサンモ オカーサンモ、オーヨロコビデ、「ホントーニ ヨイ  
 コダ。コンナ ヨイ コオ、ネズミノ オヨメサンニ スルノワ  
 オシー。セカイジューデ イチバン エライ カタノ オヨメサンニ  
 シタイ。」ト オモイマシタ。  
 オトーサント オカーサンワ、ソーダンシテ、オヒサマノ トコロエ  
 オヨメニ アゲル コトニ シマシタ。  
 ネズミノ オトーサンワ、オヒサマノ トコロエ イツテ、  
 「ワタクシノ ウチニ、タイヘン ヨイ ムスメガ アリマス。セカ  
 イジューデ、イチバン エライ カタノ トコロエ、アゲタイト  
 オモイマス。イチバン エライ カタワ、アナタ デス。ドーカ、

ワタクシノ ムスメオ モラッテ クダサイ。」

ト タノミマシタ。

オヒサマワ、

「アリガタイガ、オコトワリシマシヨ。セカイジューニワ、ワタク  
 シヨリ モット エライ ヒトガ イマスカラ。」

ト オツシャイマシタ。

ネズミノ オトーサンワ、ビックリシテ、

「ソレワ ダレ デスカ。」

ト タズネマシタ。

オヒサマワ、

「ソレワ クモサン デス。イクラ ワタクシガ テツテ イテモ、

クモサンガ クルト、カクサレテ シマイマス。クモサンニワ カ

ナイマセン。」

ト オツシャイマシタ。

ネズミノ オトーサンワ、クモノ トコロエ イッテ、

「セカイジューデ、イチバン エライ アナタニ、ムスメオ アゲタ、  
イト オモイマス。」

ト イーマシタ。

クモモ コトワリマシタ。

「セカイジューニワ、ワタクシヨリ モット エライ ヒトガ イマ、  
スカラ。」

ト イーマシタ。

ネズミノ オトーサンワ、ビツクリシテ、

「ソレワ ダレ デスカ。」

ト タズネマシタ。

クモワ、

「ソレワ カゼサン デス。イクラ ワタクシガ ソラデ イバッテ  
イテモ、カゼサンガ クルト、フキトバサレテ、シマイマス。カゼサ、

ンニワ カナイマセン。」

ト イーマシタ。

ネズミノ オトーサンワ、カゼノ トコロエ イッテ、

「セカイジューデ、イチバン エライ アナタニ、ムスメオ アゲタ、  
イト オモイマス。」

ト イーマシタ。

カゼモ コトワリマシタ。

「セカイジューニワ、ワタクシヨリ モット エライ ヒトガ イマ、  
スカラ。」

ト イーマシタ。

ネズミノ オトーサンワ、

「ソレワ ダレ デスカ。」

ト タズネマシタ。

カゼワ、

「ソレワ カベサン デス。イクラ ワタクシガ チカライッパイ  
フイテモ、カベサンワ ヘーキデ、イマス。カベサンニワ カナイ  
マセン。」

ト イーマシタ。

ネズミノ オトーサンワ、カベノ トコロエ イツテ、

「セカイジューデ、イチバン エライ アナタニ、ムスメオ アゲタ  
イト オモイマス。」

ト イーマシタ。

カベモ コトワリマシタ。

「セカイジューニワ、ワタクシヨリ モット エライ ヒトガ イマ  
スカラ。」

ト イーマシタ。

ネズミノ オトーサンワ、

「ソレワ ダレ デスカ。」

ト タズネマシタ。

カベワ、

「ソレワ ネズミサン デス。ネズミサンニ ガリガリト カジラレ  
テワ、タマリマセン。」

ト イーマシタ。

ネズミノ オトーサンワ、「ナルホド、セカイジューデ イチバン エ  
ライノワ、ネズミ ダ。」ト オモイマシタ。

ネズミノ オトーサンワ、ムスメオ、キンジョノ ネズミノ オヨメ  
サンニ シマシタ。

# 十八 シャシン

センチノ ニーサン、オゲンキ デスカ。

キョー、ミンナデ シャシンオ ウツシマシタ。デキタラ、スグ オ  
クリマス。

マンナカニ、オジーサント オバーサング オカケニ ナリ、ソノ  
 ワキニ、オトーサント オカーサング オカケニ ナリ、ウシロニ、  
 ネーサント ワタクシガ タチマシタ。ワタクシワ、セーガ ヒクク、  
 テ カオガ デナイノデ、ハコノ ウエニ、タチマシタ。

「コノ シヤシンオ ニーサング ミタラ、ドンナニ ヨロコブ コ  
 ト デシヨ。」

ト、オバーサング オツシヤイマシタ。

オトーサング

「シヤシンニ、コエモ ウツルト イーガナ。」

ト オツシヤルト、オジーサング

「テガミオ ヤレバ イーサ。ゲンキデ、オクニノ タメニ シツカ  
 リ ハタラケト、カイテ ヤロー。」

ト オツシヤイマシタ。

ワタクシワ、マイアサ、ニーサンノ シヤシンニ、「オハヨ。」オイ

ーマス。

# 十九 カゲエ

「オジサン、コンヤモ マタ、カゲエオ シテ ミセテ クダサイ。」  
 「ヨロシ。」デワ、ヤリマスヨ。

サ、イヌ デス。ワン ワン。

コンドワ キツネ。コン コン。

コレワ トビ。クチバシオ ゴラン。

「ハヤク センドーサンホ ミセテ クダサイ。」

「ハイ、コレワ センドーサン。ナガイ タケノ サオデ、フネオ

コギマス。」

「コンドワ、ワタクシガ ヤツテ ミマシヨ。」

「ホ、ナニオ ヤルカナ。」

「オジサン、コレワ ナン デスカ。」

「サ、ナンダロー。テノウエニゴムマリオノセテイルネ。」  
 「ソーデス。」  
 「フリーセンカナ。」  
 「イーエ、チガイマス。」  
 「デワ、チキューダロー。」  
 「イーエ、コレワ、オツキサマガクモカラデテクルトコロデス。」

## 二十 ニッポンノシルシ

ニッポンノシルシニ  
 ハタガアル。  
 アサヒオウツシタ  
 ヒノマルノハタ。

ニッポンノシルシニ  
 ヤマガアル。  
 スガタノリツパナ  
 フジノヤマ。

ニッポンノシルシニ  
 ウタガアル。  
 アリガタイウタ、  
 キミガヨノウタ。

## 二十一 ハナサカジジ

ムカシムカシ、アルトコロニ、オジーサンガアリマシタ。イス、  
 オイッピキカッテ、タイソーカワイガッテイマシタ。  
 アルヒ、イスガハタケノスミデ、

「ココ ホレ、ワン ワン、  
ココ ホレ、ワン ワン。」

ト ナキマシタ。

オジーサンガ、ソコオ ホツテ ミマスト、ツチノ ナカカラ、オ  
カネヤ タカラモノガ、タクサン デマシタ。

トナリノ オジーサンワ、ヨクノ フカイ ヒト デシタ。コノ

ハナシオ キーテ、イヌオ カリニ キマシタ。ムリニ イヌオ ナ  
カセテ、ハタケオ ホツテ ミマスト、キタナイ モノバカリ デマ  
シタ。オジーサンワ、オコツテ イヌオ コロシテ シマイマシタ。

イヌオ カワイガツテ イタ オジーサンワ、タイソー カナシミ  
マシタ。イヌノ オハカオ ツクツテ、ソコエ、チーサナ マツオ  
イッポソ ウエマシタ。

マツワ、ズンズン オーキク ナリマシタ。オジーサンワ、ソノ  
マツノ キデ、ウスオ コシラエマシタ。ソレデ コメオ ツクト、

オカネヤ タカラモノガ、タクサン デマシタ。

トナリノ オジーサンワ、マタ ソノ ウスオ カリニ キマシタ。  
コメオ ツイテ ミマスト、キタナイ モノバカリ デマシタ。マタ  
オコツテ、ウスオ コワシテ、ヒニ クベテ シマイマシタ。

イヌオ カワイガツテ イタ、オジーサンワ、ソノ ハイオ モラ  
ツテ キマシタ。スルト、カゼガ フイテ キテ、ハイオ トバシマ  
シタ。ソレガ、カレキノ エダニ カカッタカト オモート、イチド  
ニ、パツト ハナガ サキマシタ。

オジーサンワ ヨロコビマシタ。ハイオ ザルニ イレテ、  
「ハナサカジジー、ハナサカジジー。カレキニ ハナオ サカセマシ  
ョー。」

ト イツテ、アルキマシタ。

トノサマガ、オトーリニ ナツテ、  
「コレワ オモシロイ。ハナオ サカセテ ゴラン。」

ト オツシャイマシタ。

オジーサンワ キニ ノボツテ、ハイオ マキマシタ。スルト、カ  
レキニ ハナガ サイテ、イチドニ ハナザカリニ ナリマシタ。  
トノサマワ、

「コレワ フシギ ダ。キレー ダ、キレト ダ。」

ト オホメニ ナツテ、ゴホービオ タクサン クダサイマシタ。

トナリノ オジーサンワ、ノコツテ、イタ ハイオ カキアツメテ、  
カレキニ ノボツテ、トノサマノ オカエリオ マツテ イマシタ。  
ソコエ、トノサマガ オトーリニ ナツテ、

「モー イチド、ハナオ サカセテ ゴラン。」

ト オツシャイマシタ。

オジーサンワ、ハイオ ツカンデ マキマシタ。イクラ マイテモ、  
ハナワ サキマセン。シマイニ、ハイガ、トノサマノ メヤ クチニ  
ハイリマシタ。

トノサマワ、

「コレワ ニセモノ ダ。ワルイ ヤツ ダ。」

ト オツシャイマシタ。

オジーサンワ、トートー シバラレテ シマイマシタ。

## 二十二 ユメ

ユーベ、ネドコニ ハイツテカラ カンガエマシタ。

ワタクシニワ、オトーサンモ アリマス。オジーサンモ アリマス。  
ケレドモ、オジーサンノ オトーサンワ、オイデニ ナリマセン。

イマワ、オイデニ ナラナイガ、マエニワ、オイデニ ナツタニ

チガイ アリマセン。ソレワ、ドンナ オカタデ アツタ デショ。

コンナ コトオ カンガエテ イル ウチニ、イツノマニカ ネム

ツテ シマイマシタ。

ユメニ、ヒロイ ノハラオ ミマシタ。

ハナガ イチメンニ サイテ、チョーチョーガ トンデ イマシタ。  
 ソコエ、ヒトリノ オジーサンガ デテ キマシタ。ミルト、ワタ  
 クシノ オジーサンニ ヨク ニタ カタ デシタ。  
 ワタクシワ オモワズ、

「オジーサン。」

ト イーマスト、ソノ 方タワ、

「ワタシワ、オマエノ オジーサンノ オトーサン ダヨ。」  
 ト イッテ、ニコニコ ナサイマシタ。

### 二十三 ツクエト コシカケ

センセーガ、コジナ オハナシオ ナサイマシタ。  
 「ミナサンノ ツカツテ イル ツクエモ コシカケモ、ナガイ ア  
 イダ ハタライテ イマス。  
 ニネンセーモ、コレデ ベンキョーオ シマシタ。サンネンセーモ、

コレデ ベンキョーオ シマシタ。

ヨネンノ ヒトモ、ゴネンノ ヒトモ、ロクネンノ ヒトモ、ソノ  
 マエノ ヒトモ、コレオ ツカイマシタ。ミナサンノ マレル

マエカラ、コノ ツクエモ コシカケモ アッタノ デス。」

ココマデ オハナシオ キータ トキ、フト、ワタクシワ、ユーベ  
 ノ ユメノ コトオ オモイダシマシタ。

センセーワ、ツズケテ オッシャイマシタ。

「コンド、ミナサンガ ニネンセーニ ナッタラ、アタラシー イチ  
 ネンセーガ ハイッテ キテ、マタ ツカイマス。コノ ツクエヤ  
 コシカケオ、カワイガッテ ヤリマシヨーネ。」

### 二十四 ウゲイス

「イサムサン、モー シチジ スギマシタ。ハヤク オキナイト、ガ  
 ッコーガ オクレマスヨ。」

ト、ネーサンガ、イーマシタ。

「ハイ。」

ト、イサムサンワ、ヘンジオ、シマシタガ、マタ、ネテ、シマイマシタ。

「イサムサン、イサムサン、ハヤク、オキナイト、ガッコーガ、オク、レマスヨ。」

ネーサンワ、マエヨリモ、オーキナ、コエデ、イーマシタ。

イサムサンワ、スグ、オキヨート、オモイマシタ。ケレドモ、ネムクテ、ネムクテ、タマリマセン。

ソノトキ、ニワノ、ホーデ、

「ホー、ホケキヨ。」

ト、ナク、コエガ、シマシタ。

ネーサンワ、

「アラ、ウグイスヨ。」

ト、イツテ、ショージノ、ガラスカラ、ソトオ、ミナガラ、

「モト、ハル、デス。イサムサンモ、ジキ、ニネンセーデワ、アリマセンカ。サー、ハヤク、オーキナサイヨ。」

ト、イーマシタ。

イサムサンワ、トビオキマシタ。

ニワデワ、マタ、ウグイスガ、

「ホー、ホケキヨ。」

ト、ナキマシタ。

# 二十五 ツクシ

ボカボカト

アツタカイ、ヒニ、

ツクシノ、ボーヤワ

メガ、サメタ。

ツクシダレノコ、  
スギナノコ。

ドテノツチ

ソットアゲテ、

ツクシノボーヤガ

ノゾイタラ、

ソトワソヨソヨ

ハルノカゼ。

二十六 キシャ

「ゴ」。

ト、トークノホーデ、オトガシマシタ。

「キシヤダ。マサチャン、ミニイコ」。

ト、ニーサンガイーマシタ。

ボクタチワ、ハタケノナカノミチオハシツテ、センロノホ

ーエイキマシタ。

キシヤワ、グングンオーキクナツテ、コツチエキマス。

「カモツレツシャダ。ナガイ、ナガイ」。

ト、ニーサンガイーマシタ。

「シュツ、シュツ、シュツ、シュツ」。

ト、キカンシャガオーキナオトオタテテキマシタ。

「イクツアルカ、カゾエテミヨ」。

ト、ニーサンガイーマシタ。

クロイハコノクルマガ、アトカラアトカラヤツテキマス。

「イチ、ニ、サン、シ、ゴ、ロク、シチ、ハチ」。

ト、カゾエテ、ジューハチマデキタトキ、ウシノタクサンノ

ツテイル、クルマガ、イクツカトーリマシタ。「オヤ」トオモツ

テ イル アイダニ、ボクワ、クルマノ カズガ ワカラナク ナリ  
マシタ。

ウシノ アトカラ、オーキナ キオ ツンダ クルマヤ、イシオ  
ツンダ クルマガ、イクツモ イクツモ トーリマシタ。オシマイゴ  
ロニ ナルト、ニーサンワ、オーキナ コエオ ダシテ カゾエマシ  
タ。

「シジューロク、シジューシチ、シジューハチ。ミンナデ シジュー  
ハチ アツタ。」

ト イーマシタ。  
キシヤワ ダンダン チーサク ナツテ、トークノ ホーエ イッ  
テ シマイマシタ。

ボクワ、サツキ ミタ ウシノ コトオ カンガエテ、

「ボクモ キシャニ ノリタイナ！」  
ト オモイマシタ。

## 綴り方指導要項

### 指導の發展段階

第一期 兒童の生活を言語によつて發表することになれさせ、次第に素  
朴簡易な文章表現に進め、綴り方の基礎的態度を養ふ。

第二期 兒童の見聞する事象、日常の行動などに就き見方考へ方を指導  
して生活を豊富にし、表現の意欲を旺盛ならしめる。

第三期 文の目的と用途とを明らかにして表現を的確多様ならしめ、次  
第に國民生活の實際に應ずる表現の力を養ふ。

第四期 第三期に準じてこれを發展せしめ、國民的自覺を喚起して國語  
の豊かな表現になれしめる。なほ實務的文章にも習熟せしめる。

## 初等科第一學年

### 一 指導要項

#### 言語發表の指導

○兒童の日常使用する言語による發表を盛ならしめる。

- (イ) 日常の生活に於ける獨り言、挨拶、會話など、素朴なことばを取りあげ、それを手がかりとして自由に發表する態度を養ふ。
  - (ロ) 言語發表を嫌つたり、臆したりするものには、氣長に適當な方法を講じ、興味と自信を持たせて、積極的に語るやうにする。
  - (ハ) 方言、訛語、語法上の誤などは、順次これを矯正して正しい國語が使へるやうに導く。これも指導上氣長な辛抱が必要である。
- 日常生活の中から何を發表するか、それを發見し把握する仕方を懇切に指導する。

(イ) 日常の生活に於いて見たこと、行つたこと、考へたことなどを發表させる機會を多くする間に、一定の事柄を中心として發表する力を得させる。

(ロ) 話合、野外遊歩見學などに際し、その場で設問すること、提示した繪畫や實物、兒童の描いた繪などに就いて説明させること、學校家庭、その他に於ける遊びや學習や、飼育、工作栽培などの經過を話させることによつて、次第にまとまつた發表をさせる。

(ハ) 進んでは、各自の生活を思ひ起させ、記憶をたどつて、雑多な事象の中から感覺的に印象づけられたもの、興味をそそられたもの、感動したことなどを捉へる練習をさせる。

これが練習にあつては、初めはごく單純素朴なものにとりあげ、次第に複雑豊富なものに向かはせることが大切である。

これは綴り方にはいる最も根本的な方法であるから、十分に基礎づけておかなければならない。

○他教科他科目の指導中でも言語發表の練習をさせる。

(イ) 少しでも多く言語發表をさせ、生活を反省させ、記憶を喚びさまし、題材を發見し把握する契機を與へる。

(ロ) 言語發表をしようとする兒童は事柄を時々刻々に思ひ出しながら、ことばにするのであるから、必ずしも整然たる筋を求めることなく、その發表欲を満足させることが大切である。

### 文章表現の指導

○言語表現から文章表現にうつる間に、過渡的な方法として繪畫を描かせる。

(イ) 話す事柄を日常生活の中から發見し、發表することだけでも、兒童にとつてはかなり程度の高い、精神的な作業である。これを文字に移すのは更にむづかしいことである。  
この困難な仕事を、躓くことなくさせるために、いろいろ工夫して善導することが大切である。

(ロ) 繪を描かせることは有効な方法の一つである。それは繪を描くことによつて、ただ事物を羅列することから進んで、物と物、事件と事件との關係や秩序が組立てられるやうになるからである。

更に繪は何枚か續けて描くことにより、時間的な展開を示すことができる。事物の動きを具象化することが會得されるのである。

(ハ) 繪を描かせて、それをことばで説明させたり、或は文字を書き入れさせたりして、表現能力を養ひ、次第にこれを綴り方に導く。

○題材をなるべく廣く取るやうに導く。

(イ) 日常の生活に於いて見たこと、行つたこと、考へたことなどを題材として文章に表現するやうに導く。日常の遊びや仕事や學習や作業などを、そのまま記述することが綴り方であるといふ氣輕な心持で、綴り方に向かはせ、生活のあらゆる機會を利用して書く、事柄の具體的な指導を行ふ。

(ロ) 文章表現への自發的な興味を喚起するやうに導く。

日記手紙詩などのやうな形で記述させることによつて、綴る興味を  
昂める。

児童相互の綴り方を讀みあひ、又短い文詩など適當な文例を示し、興  
味とともに児童の能力を引出す機會を多くする。

(イ) 他教科他科目との緊密な聯關を保ち取材の範圍を廣くする。たと  
へば理數科に於ける草花や動物などの觀察栽培飼育等と連絡して  
生活の興味と表現との自然な結びつきをはかる。

○思ふままに記述をさせ書寫能力を養ふ。

(イ) とりたてて、構想や腹案等の指導を行はず、經驗の順序によつて、自由  
に記述させる。

(ロ) 用語は児童の生活語から出發し、次第に正しい國語の表現に向かは  
せる。

綴り方は方言だけで書けるものではない。方言だけで書けといへ  
ば、かへつて児童の筆は滯つてしまふ。讀み方、その他の讀物、話し方

その他の言語生活に於いて、正しいことばづかひや正しいひまは  
しをよく練習させなければならぬ。

誰にもわかるやうにはつきりといひあらはし書きあらはすやうに  
させる。そのために、自分の文を度々讀みなほす習慣を養ひ、訂正の  
仕方を教へる。

(ハ) 表記の基礎的指導を行ひ、書き方と關聯して書寫能力を練る。  
カナヅカヒ句讀點などは讀み方に準ずることを建前として指導す  
る。

書き方と聯關して、文字を正しく書き得るやうにし、且氣輕に鉛筆が  
持てるやうに練習する。

## 二 指導要項例

### 第一學期

## ○簡単な話合

- (イ) 挨拶や應答がはつきりいへるやうにする。
- (ロ) 見たこと、したこと、聞いたこと、考へたことなどの話合をさせる。
- (ハ) おもしろい話をかしい話、珍しい話などを、話合からとりあげるやうにする。

## ○生活の言語發表

- (イ) 野外遊歩、見學など、その場で問答したり、又見聞したことに就いていはせたりする。
- (ロ) 提示した實物や繪畫、兒童の描いた繪などに就いて、いろいろの發表をさせる。
- (ハ) 遊び、學習、飼育、工作、栽培などの經過を發表させる。

## ○發表をとりあげる

- (イ) 兒童の發表した面白い個性味のある短い話を書きとめておいて、みんなに聞かせてやる。

- (ロ) 兒童の獨り言や誰かに言つたことや、説明したことなどを、その時の様子と結びつけてみんなに話してやる。

## ○繪による發表

- (イ) 日常の生活におけるいろいろのことを、繪で發表させる。
- (ロ) 繪日記、紙芝居など、連續した繪話を作らせる。
- (ハ) 短いことばを書き入れ、繪とき、繪入りの文を書かせる。

## ○發聲及び表記の基礎的練習

- (イ) 話合や言語發表における兒童のことばをとりあげて、發聲の基礎練習をする。
- (ロ) 興味ある短い文を選んで、その視寫聽寫をさせる。

## 第二學期

## ○夏休の繪日記

- (イ) 學級で展覽し、お互の作品をよく見るやうにしむける。

(ロ) 題材のとりかへ方のよい作品をほめて、取材の仕方を指導する。  
○行動の叙述

- (イ) 自分のしたことを、お話するやうに書かせる。  
(ロ) うちの人のことや、身のまはりの自然のことにもふれて書くやうにする。しひてまとまつた話にさせなくてもよい。

○發表をとりあげる

- (イ) 第一學期に準ずるものをとる。  
(ロ) とりあげたものを適當な方法によつてよく讀ませ、題材のとりかへ方やあらはし方のちがひに注意させる。

○短い文の視寫聽寫

- (イ) 書き方と聯絡して書かせ、特に促音濁音長音拗音句點字配りなどに氣をつけさせる。  
(ロ) 書寫は、まづよいものをほめることによつて、自發的につとめるやう仕向ける。

○郵便ごっこ

- (イ) 役割をきめて郵便ごっこをさせる。  
(ロ) 生活の實際を通信しあふやうにする。

○紙芝居の製作

- (イ) 繪と文どを使つて、連續した表現をさせる。  
(ロ) 想像によるもの、自分の行動をあらはすもの、自然をうつすものなどを書かせる。

○冬休の綴り方

- (イ) 戦地の兵隊さんへあてた年賀狀の指導をする。  
(ロ) 繪日記の書き方を指導する。

### 第三學期

○冬休の繪日記

- (イ) 第二學期夏休後の方法に準ずる。

(ロ) 題材のとらへ方のほかに、あらはし方のよい作品をほめるやうにする。

#### ○遊びを書かせる

(イ) 正月の遊び、かくれんぼなど、遊びのおもしろさを中心にして、自分の行動をくはしく書かせる。

(ロ) 對話を入れること、對話にかぎをつけること、句點を正しくうつことを指導する。

#### ○うちの人

(イ) 親しみの心で、うちの人のことをくはしく書かせる。

(ロ) その人の様子のよくあらはれたところをほめるやうにする。

#### ○手紙の文

(イ) 兵隊さんから來た手紙などを讀みあふやうにする。

(ロ) 兵隊さんや病氣の友だちによびかけた文を書かせ、手紙を書く準備をやる

#### ○詩

(イ) 感動したことがらを、短いことばで書かせる。

(ロ) 改行分節などにはあまりこだはらず、感じたままに表現させるやうにする。

(ハ) 程度にあつたよい作品を鑑賞させる。

#### ○作品の朗讀

(イ) 自分の書いたものをお話のやうに讀むやうに仕向ける。

(ロ) 人の綴り方を喜んで聞くやうに導く。

#### ○自分でなほすことの練習

(イ) 自分の綴り方を何べんも讀みなほすやうにさせる。

(ロ) 書き足りないところを見出して、それを補ふ方法を教へる。

#### ○一年間の綴り方

一年間の綴り方をまとめさせ、それをよく讀みかへして、生活を反省させる。

### 三 参 考 文 題

(次に掲げた文題は指導上の参考に供するものである。これを手がかりとして題材を適當に選ぶべきである。)

#### 第一學期

四月

オウチノコト

〔おうちの人赤ちやん、おもちゃ、犬、猫、鶏、牛、馬、花などに就いて氣樂に話させる。〕

ガクカウノコト

〔はじめて學校へ來た時のこと、みんなとの遊び先生のこと、教室のことなど。〕

ツウガクノコト

〔學校に來る途中で見たり、聞いたりしたこと、誰といつしよに來たか、どんなことをお話したかなど。〕

テンチャウセツ

〔式のこと、國旗のこと、先生のお話のことなど。〕

五月

エンソク

〔前の晩のこと、その日の朝のこと、途中のこと、お辨當のことなどを順に話させる。〕

ウンドウクワイ

〔大體「遠足に準ずる。自分のしたこと、人のしたことなど。〕

オセツク

〔かしは餅、私のうちの鯉のぼり、學校の鯉のぼりなど。お節供に何をして遊んだかなど。〕

ハナトコトリ

〔好きな花、朝顔の芽生え、好きな小鳥、小鳥の鳴き聲などに就いて。その他小動物など。〕

六月

オテツダヒ

〔お使ひ、子守、庭はきのお手傳ひ、水くみなどに就いてくはしく話させる。〕

アソビ

〔ままごと、かくれんぼ、兵隊ごっこ、なはとび、水遊びなど、その時の様子を誰にもわかるやうに話させる。〕

アメ

〔雨でこまつたこと、雨の日にもうちで遊んだこと、雨の日の通學など。〕

ヒカウキ

〔飛行機を見た時のこと。どんな形をしてゐたか、どんな音がしたかなど、その時の感動をそのままにいひあらはさせる。またおもちゃの飛行機をとばしたことなど。〕

エホンノハナシ

〔繪本に書いてあつた繪の話などを中心に、買つてもらつた時、いただいた時のことなどをいつしよに話させてもよい。〕

七月

タナバタ

〔うちの七夕祭、學校の七夕祭など、天の川のことなどに觸れて話させる。〕

ガクゲイクワイノコト

〔何が一番おもしろかつたか。出演したにいさん、ねえさん、お友だちのこと、劇、お話などを思ひ出して話させる。〕

オボン

〔うちのおぼん、おぼんにしたこと、お墓参りなどに就いて、經驗を中心。〕

ソトデアソンダコト

〔水泳、魚釣り、箱庭づくり、花つみ、蟬とり、線香花火など、行動を中心にして話させる。〕

オマキリシタコト

〔神社、お寺にお参りした時のこと。いつ、誰とどんな日に。どんなにしてを、がんだかなどをくはしく。〕

コノゴロノヤサイ

〔畠または庭さきのいんげん、きうり、なすなどに就いて。〕

第二學期

九月

ナツヤスミノオハナシ

〔夏休中の生活を思ひ思ひに話させ、その中のあるものを記述させる。書いた繪を整理して説明を加へさせる。〕

アラシノ日

〔あらしの日のうちのこと、庭の草や木のこと、たんばのこと、通學途中の見聞など。〕

ムシ

〔とつた虫、見た虫、虫の鳴き聲など。いなごとり、ばつたとりなど、興味の中に觀察を織り込んで書かせる。〕

オ月見

〔お月見の川意、いろいろなさなへもの、お手つだひなど、うちの生活に關聯させて。〕

ガクカウ、エン

〔このごろの學校園に就いて書かせる。繼續觀察をやや加へ、日記風に書かせてもよい。〕

十月

エンソク  
山ノボリ

〔途中の見聞を書かせる。斷片的な短いことばで詩の形になつてもよい。〕

ウンドウクワイ

〔時間的に全體を記述させる。或は自分のしたことを中心に書かせてもよい。〕

オマツリ

タンボノヤウス

キイタハナシ  
ヨンダ本

十一月

メイヂセツ

コノゴロノクダ  
モノ

ヘイタイサンニ

エ日キ

エバナシ

〔お祭の来るまでのこと、前の晩のこと、お参りした時の様子、お祭の御馳走、お小遣のことなど、くはしく。〕

〔いねかり、いねこき、おちばひろひなど、自然の様子といつしよに書かせる。〕

〔友だちとの話、うちの人から聞いたこと、おもしろかつたラジオの話讀んだもののあらすちなど、友だちに話すやうに。〕

〔式の様子、學校から歸つて遊んだこと、天氣のこと、明治節に就いて聞いたお話、菊の花のことなど。〕

〔柿、栗、りんご、みかん等、栗ひろひ、柿もぎ、みかんとり、いもほりなどに就いて書かせてもよい。〕

〔特に慰問文の指導としないので、うちの様子、村や町の様子、學校の様子などをお話の形式で書かせる。〕

〔自然の觀察を繪日記に書かせる。雲の日記、コスモスの日記、雞の日記など。〕

〔讀んだ話を紙芝居風に書かせ、その説明を書かせる。〕

十二月

冬ノアサ

カヒモノ

シモヤケ

モチツキ

第三學期

一月

グンジンジツノアサ〔元日の朝の行事を體驗のままくはしく書かせる。〕

エ日キ

〔お正月の三日間、或は五日間の生活の中から、特におもしろかつたことを繪と文で書きあらはす。〕

〔早起、ラジオ體操などに聯關させて、寒い冬の朝の自然や行動を書かせる。〕

〔おとうさん、おかあさんといつしよに買物をしたこと、自分で物を買つたこと、買物ごつこなどの體驗を書かせる。計算の興味を附隨させて。〕

〔自分のしもやけ、友だちのしもやけなど、手袋や足袋、火鉢などに聯關させて書かせる。〕

〔お正月の用意、すきはき、障子のはりかへ、餅つき、その他楽しいお正月を待つ氣持を行事に聯關させて書かせる。〕

オ正月ノアソビ

シャシン

キモノ

二月

マメマキ

キゲンセツノ日

ユメ

日ナタボッコ

學ゲイクワイ

三月

〔たこあげ、はねつき、すごろく、相撲、雪合戦など。〕

〔寫眞をとつた時のこと。家にある寫眞家庭全部でとつた寫眞などに就いて、くはしく書かせる。説明的になつてもよい。着物、えりまき、外套など、いつ誰に買つてもらつたか、どんなに大切にしているか、どうしてよごしたかなど書かせる。〕

〔誰が豆まきをしたか、そのときの様子、その夜のことうちの人たちの年齢のことなどをくはしく書かせる。〕

〔式のこと、先生のお話のこと、何をして遊んだかなど。〕

〔見たゆめ、ひとのゆめの話、どんなゆめが見たいかなど。〕

〔ひなたぼっこをしてゐる時のいろいろな觀察。實際にひなたぼっこをさせて、詩の形で書かせてもよい。〕

〔學藝會の様子をくはしく書かせる。〕

オヒナサマ

オカアサン

ウグヒス

二年生ニナル

〔おひなさま、去年のお節供、お節供の御馳走、お客さまのこと、誰と何をして遊んだかなど。〕

〔地久節、母の日に聯關させて、おかあさんをよろこばせたことや、どういふ時にどういふことをしたら、おかあさんがよろこばれるだらうといふやうなことを書かせる。〕

〔うぐひすの様子や、鳴き聲などに就いて。その他の小鳥のことでもよい。〕

〔二年生になる楽しさ、うれしさを書かせる。二年生になつたらといふ氣持を多少感想風に書かせるのもよい。〕

## 話し方指導要項

## 指導の發展段階

## 第一期

児童と話をするあらゆる機會に留意して、はつきりとおちついてものをいふやうに導き、「ヨミカタ」で得たことばを手がかりとして發音や語法を訓練し、次第に生活の中に活用するやうにつとめる。又人の話を注意して聞くやうに仕向ける。

## 第二期

児童の見たこと、聞いたことなどに就いて順序だてていへるやうに、ことばづかひや、いひまはしなどを正しくするやうに導き、人の話をよく聴く態度を養ふ。

## 第三期

自分のいほうとすることを要領よく話し相手と場合に應じてそれぞれふさはしい話ぶりをし、ふさはしいことばが使へるやうに導き、人の話の要點をつかみ得る力を養ふ。

## 第四期

同じ話でも、相手にわかりやすく、しかも興味深く語り、上品なことばづかひをするやうに導き、又男女によつて、ことばづかひに違ふ點もあることをわきまへて話すやうにさせる。  
なほ、話をしたり聞いたときには、相手の心持をくむことが大切であることを知らせ、その心がまへを養ふ。

## 初等科第一、二學年

## 指導要項

(一) 話し方は、読み方指導を中心に、これが基本的指導をなす。そのため特に左の事項に留意する。

(1) 読み方、話し方を一體と考へ、読み方の教材たる挿畫(掛圖)文章等を中心として、話合をさせる。

(2) 話合に於いては、すべての兒童に話す機會を與へることにつとめて、言語發表を盛にし、これを適正に指導する。

特に言語發表を嫌つたり、臆したりするものには適當な方法を講じ、先づ氣輕に話すやうに仕向ける。

(3) 読み方教材を通じて、正しい發音、ことばづかひになれさせ、教材を朗讀暗誦すること、言語を身振にあらはすこと、對話を實演することなどにより、正しい話し方に導く。

(二) 話し方は綴り方指導に於いても、これが積極的指導を行ひ、特に左の事項に留意する。

(1) 綴らうとする主題を中心にして、兒童の見たこと、聞いたこと、考へた

こと等の話合をさせ、言語發表の修練をさせる。

(2) 綴り方を單に書かせるだけでなく、それを朗讀し、また聴くことになれさせ、まとまつた話をしたたり、聴いたりする修練をさせる。

(3) 兒童の綴り方を中心として、いろいろな話合をさせ、これを話し方として適正に指導する。

(三) 他教科他科目の指導と聯關して、常に言語修練をなす。そのため特に左の事項に留意する。

(1) 修身禮法と聯關して、挨拶返事姿勢態度等の躰をなす。

(2) 音樂と聯關して、發音發聲を正すことにつとめる。

(3) 理數科に於ける觀察や作業と聯關して、事物事象とことばとの正しい結合を圖り、正確な言語の使用に導く。

(4) 兒童の圖畫工作に就いて、自分の經驗や思つたことを發表させ、話し方の修練をなす。

(5) お話會學藝會等に於いて、他教科他科目の學習、諸行事、童話讀物等を

(四) 話題として、大勢の前で話すことの初歩的指導をなす。  
話し方の指導は、児童の生活のあらゆる機会に於いて行ひ、常にその場  
その場に於ける言語修練に留意する。

(1) 特に初期の話し方指導に於いては、教師は児童の親しい話相手とな  
り、話の誘導者となり、又児童相互の仲介者となつて、すべての児童に  
気軽に話す機会を與へることにつとめる。

(2) 教室に於ける問答、話合はもとより、教室外に於けることばづかひに  
就いても常に留意して、一般的または個人的に指導する。

(3) 教師はつとめて醇正なことばを使用し、特にこの時期では、丁寧なこ  
とばづかひをして、児童をして知らず識らずの中に、それに倣はせる  
やうにする。

(4) レコードラジオ等を選択利用して、正しいことばになれさせる。

(5) 家庭と協力して、挨拶その他日常語を正しく使ふやうに奨める。

昭和十六年九月八日 印刷  
昭和十六年九月十日 發行

(非賣品)

著作權所有

著作  
者兼  
發行  
者

文  
部  
省

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷者

大  
橋  
光  
吉

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所

共同印刷株式會社

